



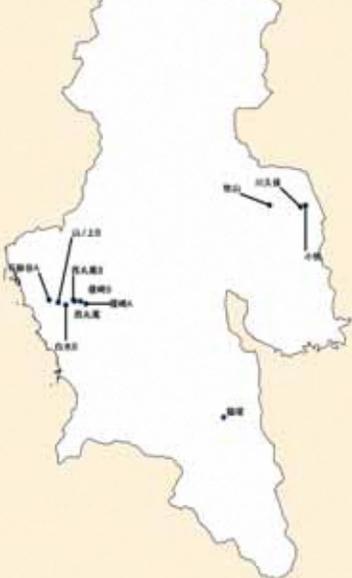
西丸尾遺跡のナイフ形石器

市内の旧石器遺跡

大変古い時代である旧石器時代の遺跡は、鹿屋市内ではあまり知られていませんでした。

しかし、近年の高速道路、国道220号バイパス、県道建設の工事に行なわれる発掘調査で、次々と旧石器時代の遺跡が確認されています。

現在は11遺跡が知られ、太古の鹿屋の様子が少しずつわかり始めています。



031

旧石器時代

日本では、およそ3万7000～8000年前から人類が出現するといわれ、縄文時代が始まる1万6000年頃までを、旧石器時代といいます。種子島では、3万5000年前を越える地層から生活跡が見つかっていますので、その頃から大隅半島にも人類がいたものと考えられます。

この時代の日本は大陸と陸続きになった時期もあり、大陸からナウマンゾウなどの大型動物を追って、人々が日本列島へ移住してきました。当時は簡単な小屋や洞窟などに住み、食料を求めて移動生活をしていました。打製石器は、狩りに使う槍先やり、動物の解体、木や骨の加工など、目的にあわせて石を加工していました。

鹿屋市でも旧石器時代の遺跡が見つかっています。郷之原町榎崎遺跡えのきさきや白水町西丸尾遺跡などで石器が見つかっており、約2万5000～6000年以上前から人々が生活したものと考えられています。

榎崎遺跡からは、細石刃さいせきじん・細石刃核さいせきじんかく・削器さっき・搔器そうき・くさび形石器・ナイフ型石器・台形石器・石斧せきふなどが出土しています。特に、水晶で作られた石器や畦原型うねはらがたと呼ばれる細石刃核などは貴重な資料と呼ばれていま



うねはらがたさいせきかく
川久保遺跡の畦原型細石核

写真提供：鹿児島県立埋蔵文化財センター

す。西丸尾遺跡からは、シラス直上の黒褐色粘土質からナイフ型石器、剥片尖頭器、台形石器等が出土し、その上の茶褐色粘土質からは、細石刃や局部磨製石斧、礫器、敲石が出土しています。

一般的にナイフ形石器文化から細石器文化へと変遷します。串良町川久保遺跡では、ナイフ形石器文化や細石器文化の時代の礫群が多く見つかりました。これらは、縄文時代の集石と同じように調理に用いられたものです。狩猟が行われる一方で、南九州では落とし穴も多く見つかり落とし穴猟も行われていました。今から約3万年前の始良カルデラの噴火により、厚いシラス層の下に深く埋もれているため、これより古い旧石器時代の全容をつかむことができません。始良カルデラ噴出物の薄い、種子島や宮崎県では、4万年前に遡る石器や礫群・落とし穴が見つかりました。



畦原型細石核等（川久保遺跡）

写真提供：鹿児島県立埋蔵文化財センター

シラスから見つかった炭化木



1997（平成9）年輝北町諏訪原での工事中、シラスから突き出た炭化木が発見されました。

この炭化木は「カシ」の木で、始良カルデラの噴火と火砕流の熱によって炭になってしまったものですが、直立状態で見つかることは大変珍しいそうです。

始良カルデラの大噴火の前はカシなどの照葉樹が茂り、ドングリなどの採取が容易にできたことが想像できます。



小牧遺跡で見つかった石皿を
主体とした祭祀空間



田原迫ノ上遺跡の縄文時代早期
の貝殻文円筒土器と石器

連穴土坑で燻製づくり

連穴土坑は、燻製づくりの施設であるという説が打ち出されて以来、実験考古学の立場などからその説をあとおしする実験結果が得られています。

具体的には地面に掘った二つの穴を地下つなぎ、一方の穴に肉などをつるし、もう一方の穴で火を焚いて燻製を作るものです。

鹿児島県内でも多くの連穴土坑が発見されていて、上野原縄文の森（霧島市）などで復元されたものを見ることができます。



益畑遺跡（串良町細山田）
で発掘された連穴土坑

032

縄文時代

縄文時代は縄文土器の出現とともに開始し、最近の研究では1万6000年前から3000年前までの1万3500年間で縄文時代といわれます。

今のところ鹿屋市で最も古いのは、約1万4000年前の隆帯文土器が出土した南町の伊敷遺跡で、草創期にあたります。

縄文時代早期の打馬平原遺跡や串良町益畑遺跡では、住居跡や連穴土坑、そして九州南部特有の貝殻で文様をつけた土器などがみつかりました。また飯盛ヶ岡遺跡では、この時期に約130基もの集石遺構が見つっています。

縄文時代の人々は、^{たて}竪穴住居を築いて定住を始め、狩猟・採集や漁をして暮らしていました。自然の恵みに左右される生活であったために、人々はさまざまなまじないをしていたと考えられています。

例えば垂水市柘原貝塚の人々の埋葬された様子を見ると、屈葬という体を曲げて埋葬する方法がとられています。これは、死者の霊がさまよい出るのを防ぐためと考えられています。また、発掘された頭骨によると、ある一定以上の年齢になると抜歯（歯を抜くこと）を行っていたことがわかっています。これは、成人の儀式の一つではなかったかと考えられています。



町田堀遺跡の埋設土器（地甕・縄文時代後期）



町田堀遺跡出土 埋設土器

写真提供：鹿児島県立埋蔵文化財センター

縄文時代後期の牧山遺跡では意図的に土器を埋めて、儀式に使ったと考えられる痕跡があり、小牧遺跡では石皿を中心として儀式を行った痕跡が見つかっていません。東日本の縄文文化にみられる石製呪術具である石刀と石冠も出土しており、豊かな実りを祈った縄文時代の人々の姿が浮かんできます。

鹿屋市から大崎町に広がる縄文中期の細山田段遺跡では、遠くは瀬戸内地方や近畿地方の系列の土器も出土していることから、縄文時代の人々が遠方の人々とも交流していたと考えられます。

また、近年見つかった縄文時代の遺跡のほとんどが、旧石器時代から近世の遺物や遺構と一緒に発見されています。このことから、鹿屋市の周辺は昔から人が暮らしやすい、人々がずっと生活してきた土地であることがわかります。



町田堀遺跡の竪穴住居跡（縄文時代後期）



町田堀遺跡の石刀（縄文時代後期）

写真提供：鹿児島県立埋蔵文化財センター

縄文時代のゴキブリ？

小牧遺跡（鹿屋市串良町細山田）で見つかった約4500年前の土器片の底には、何とゴキブリの卵鞘（卵を包むカプセル）の圧痕が検出されました。人間が住むところにゴキブリがいるというのは、今も昔も変わらないようです。



上述土器片の底面拡大



上述土器片の側面と底面

写真提供：鹿児島県立埋蔵文化財センター



山ノ口式土器



西ノ丸遺跡
最南端の環濠集落東側大溝

弥生文化の^{でんば}伝播

遺跡の発掘から、九州南部に多く見られる農耕や土器などの文化は、まずは薩摩半島西岸地域に伝播し、次第に海岸沿いに広まったと考えられています。

鹿児島市魚見ヶ原遺跡、大隅半島において、鹿屋市高須、浜田の榎原遺跡や垂水市宮下遺跡から弥生時代前期の土器の出土が見られ、鹿児島湾岸の低地に弥生文化が伝播したのと思われる。

また、串良川、肝属川流域の吉ヶ崎遺跡や西ノ丸遺跡、高付遺跡等にも弥生土器が多く出土しています。

突帯文土器（板付Ⅱ式）と呼ばれる弥生時代初めの土器や弥生時代中期の山ノ口式土器なども数多く見つかっています。

033

大きなムラの誕生

鹿屋市における弥生時代は、遺跡の遺物等から約2500年前ぐらいからと考えられます。また、「ムラ」を考えるうえで、稲作の伝播が密接に係わっているともいわれています。一般的に弥生時代の稲作は、海岸砂丘の後背湿地から初期水田が定着したといわれています。しかし、鹿児島県ではシラス台地を^{かいせき}開析する^{たに}谷水田^{すいてん}も利用されました。また、台地が多く平野の少ない大隅半島では、弥生時代前期の人々は台地の上で^{りくとう}暮らしていました。畑作を中心とした生活（陸稲）を行いつつ、水田を取り入れながら水田稲作へと向っていったと考えられています。

弥生時代中期になると、大きなムラが見られるようになります。弥生時代中期の大規模な集落跡である王子遺跡^{ほったてはしらたてもの}では、^ほ竪穴住居跡が27軒、^ほ掘立柱建物跡が14棟発見されました。この他、串良町細山田の田原迫ノ上遺跡でも竪穴住居跡が31軒、掘立柱建物跡が41棟で構成される集落が確認され、大型の住居と通常の住居、倉庫跡など共同体の存在がうかがわれます。

やがて弥生時代中期になり、人々は収穫をあげるため積極的に平野の開拓を始めます。



名主原遺跡 花卉型住居



王子遺跡資料館復元住居

大崎町沢目遺跡、肝付町後田遺跡、東串良町西牟田遺跡など、^{こうはいしつち}後背湿地や^{びこうち}河川沿いの微高地などに遺跡が見つかり、集落が形成されたことをうかがわせます。また、串良町の西ノ丸遺跡では、標高約4mの^{ちゅうせきち}沖積地に^{かんこう}環濠（東大溝と西大溝がつながることを地中レーダー探査により確認）を持つ集落が確認され、稲作に適した場所へ集落も移ってきたことを示しています。本市では、王子遺跡や田原迫ノ上遺跡のように台地上に形成された集落や、沖積地に形成された集落等が発生し、いずれも家族だけの単一集団でなくいわゆる一族（親族）集団が増加し集落を形成しています。これらのことから、本市においても鹿児島県内の弥生時代中期には、集落＝「ムラ」が発生し、その「ムラ」は円熟して大規模な「ムラ」へと成長し、他地域とも活発に交流し、幅広い文化を受入れそれらを我がものとして、次代へつなぐ基礎をなしたものと考えられます。



王子遺跡出土 モミ跡のある土器

土器に描く

鹿屋市の遺跡から出土する弥生土器は、錦江町の山ノ口集落の砂丘から出土した土器（山ノ口式土器）と同じ形文様のものが多く発見されています。



櫛描文のある土器



矢羽根状の透かしのある土器

王子遺跡から見つかった山ノ口式土器は、煮炊きにするカメ形土器と穀類や水等を貯蔵する^{つぼ}壺形土器があります。

壺形土器の口縁部や胴部付近に、工具で引いた線のできた文様（櫛描文）が描かれたものや、^{やばねねじょう}矢羽根状の透かしを入れた高坏の脚台、三角形の形をしたものも見つかっていて、瀬戸内地方や東九州と交流があったこともわかります。



王子遺跡空撮

石包丁の使い方

名主原遺跡出土の石包丁は頁岩製で、背部が弧状に湾曲し、刃部は直線で、背部中央に2個のひも通しの穴があります。使い方は、中央にあけられた穴に紐を通し、そこに指を入れて握り、稲などの穀物の穂を摘み取るようにできています。現在の鉄製の鎌と比べると手間のかかる作業ですが、実った稲から順に収穫ができる便利さもあったようです。



名主原遺跡出土石包丁

写真提供：鹿児島県立埋蔵文化財センター

034

他地域との交流・鉄使用

弥生時代に入り、九州北部等では中国・朝鮮半島から金属器が流入し、鉄器や青銅器と石器が使われる時代になっていましたが、大隅地方では、新しい文化がまだ伝わらず石器が多く使われていたようです。そのことを裏付けるように、串良町上小原の栄田地区からは青銅製の剣をまねた磨製石剣が出土しました。出土した磨製石剣は、長さ17cm、剣身部は12cmの硬質の粘板岩製で、欠けは見られるものの完形品でした。また、他にも居住床面からも鉄鏃をまねた石鏃が発見されています。

鉄属製品としては、弥生時代中期の牧山遺跡から青銅製ノミ、弥生時代前期の永吉天神段遺跡（大崎町）鉄鏃、沢目遺跡（大崎町）鉄斧などが出土されており、武器から鉄器化が始まり、工具などに広がりました。王子遺跡からは、鉈、刀子などの加工用工具が出土しています。この中の鉈は福岡県太宰府市の吉ヶ浦遺跡から出土した鉈と同じ型であることが報告されています。王子遺跡からは、さらに鉄の加工技術をもっていることを示す鍛冶滓も出土し、この鍛冶滓は、朝鮮半島で製鉄された鉄が素材として持ち込まれて、この地で鍛冶により形作られたとも考えられます。

これらのことから北州北部・東部から金属器文化が



栄田遺跡出土石剣



大崎町永吉天神段遺跡の弥生前期の鉄鏃

写真提供：鹿児島県立埋蔵文化財センター

波及し鉄文化が大隅半島に渡来したと考えられます。

一方、土器の変遷をみていくと、弥生時代前期は北部九州の板付式土器が持ち込まれ、やがて在地化した入来式土器や山ノ口式土器が使用される中で、弥生時代中期後半から後期には、北部九州のものや瀬戸内のものが王子遺跡からも出土していることから、これらの地域との交流が行われていたことが考えられます。

- 鉋（やりがんな）・・・木材を平らに削る工具
- 刀子（とうす）・・・切る工具 現在の小刀のようなもの
- 鍛冶滓（かじさい）・・・鉄くずのこと

王子遺跡出土鉋



○台地に暮らした人々の集落



「王子遺跡住居跡」

写真提供：鹿児島県立埋蔵文化財センター

青銅製ノミ

（牧山遺跡出土）

銅ノミは、銅製品で発見されているものは日本で5例しかなく、特に鑄造したものは3例しか出土例がありません。その3例の中の1つです。鏡や銅鐸など鑄造する鑄型に文様を彫り込むために使われたものといわれ、なぜ九州南部に単独で出土したかは謎です。



牧山遺跡青銅製ノミ

（長さ4.4cm、幅0.8cm、最大厚0.7cm、重さ10g）

写真提供：鹿児島県立埋蔵文化センター

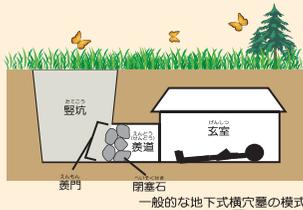


岡崎古墳群は鹿屋市串良町岡崎の事代主神社周辺に位置しています。

古墳と地下式横穴墓

「古墳」は高く土を盛り上げて造られる墓です。鹿児島県では、円墳や前方後円墳が志布志湾沿岸や北薩西岸にのみ見られ、大和政権とのつながりを意味します。

一方、「地下式横穴墓」(下図)は、大きな墳丘をもたず、地面に竖穴を掘り、さらに横穴を掘って墓室をつくるもので、宮崎・鹿児島だけに集中してみられるものです。



西祓川町の「祓川地下式横穴墓」では34基が確認され、昭和25年に形を残した短甲と膏(下写真)が出土しました。串良ふれあいセンター内に展示しています。



035

鹿屋の古墳～岡崎古墳群

3～4世紀になると、土を高く盛り上げて造る「古墳」と呼ばれる大型の墓が近畿地方を中心に盛んに造られるようになりました。豪族と呼ばれる当時の権力者たちが、権力の大きさを示すために造らせたお墓とされています。様々な形の古墳のうち大阪府の大仙陵古墳(大仙古墳：仁徳天皇陵)のような前方後円墳も日本各地に造られるようになりました。

これは大和地方(奈良)の豪族(大和政権)が、各地の豪族を支配した証として、日本各地に造らせたものとされています。

そして鹿屋市串良町の岡崎古墳群にも前方後円墳が2基見つかっています。さらに志布志湾に面した肝属平野(肝付町)や横瀬古墳(大崎町)、飯盛山古墳(志布志)など、多くの前方後円墳が見られ、特に唐仁古墳群(東串良町)の唐仁大塚古墳は全長180mもの大きさで県内最大の前方後円墳です。さらに範囲を広げると、宮崎県西都原古墳群など日向灘に面する一帯にかけて前方後円墳などの古墳が発見されていることから、大和政権の勢力は南海産貝交易のため九州南部の東岸に沿って強大な豪族たちとつながりがあったと考えられます。



(左) 現在の岡崎 15 号古墳の様子。写真右側が前方部にあたります。
(右) 15 号墳から発掘されたヒスイ製の勾玉、管玉。

鹿屋市串良町の岡崎古墳群はこうした志布志湾岸の古墳の1つです。5世紀前半のものと見られ、1985（昭和60）年から調査が始まり、住宅横や竹林の中に、12基の古墳がこれまで確認されています。従来はすべて円墳とされてきましたが、2004（平成16）年に2基が前方後円墳であると確認されました。中でも15号墳は全長25mの帆立貝型の前方後円墳で、石棺の内外からは甲冑片やヒスイ製の勾玉なども出土しています。また、前方後円墳のくびれ部に地下式横穴墓が造られているという珍しい例も見られました。立小野堀遺跡や町田掘遺跡でも大規模な地下式横穴墓群が見つかり、大和政権に従いながらも伝統的な地下式横穴墓も造っていたのです。地下式横穴墓は保存や公開が難しく、埋め戻されているものも多いです。

さらに岡崎古墳群からは、他にも朝鮮半島で作られたと考えられる鉄鋌、U字形鋤鋤先などの、鉄製品や琉球のイモガイ製貝釧などの副葬品が良好な状態で見つかり、古墳時代の交易が九州南部だけでなく、朝鮮半島や琉球など、広範囲に及ぶ地域とつながっていたと考えられています。

※貝釧・・・貝製のうでわ

上小原古墳群



岡崎古墳群と同じ串良町の上小原には5世紀中頃の前方後円墳2基、円墳20基、地下式横穴墓4基をもつ上小原古墳群があります。円墳は消滅したり、墳丘が削平されているものも多いです。前方後円墳である4号墳の近くからは1977（昭和52）年に須恵器の樽形ハソウ（下写真）が出土しています。





益畑遺跡：出土品



名主原遺跡：石包丁

縄文時代に沢山 見つかるのは どんな土器？

皆さんは、縄文時代の土器は、縄目の模様を付けた土器だけと思っていませんか？

実は、鹿児島県では、縄文時代の土器には縄目の模様の土器が見つかることはほとんどなくて、縄文人がよく食べていた、貝殻を使った文様が数多く見つかっています。

また、縄文土器の文様は何種類あるのでしょうか？

実は、数百種類あるといわれています。

縄目の模様



縄目以外の模様と道具



山内清男1979「日本先史土器の縄紋」から転載

036

遺跡から見つかった物

ここでは、縄文時代から古墳時代にかけて鹿屋市で見つかった遺物を紹介します。

串良町の益畑遺跡や吾平町の和田遺跡は、今から約10600年前の縄文早期の遺跡で、縄文土器や石器が多数見つかっています。輝北町の前床遺跡や鳥居ヶ段などからも縄文土器が発見されています。鹿児島県では上野原遺跡が縄文時代の遺跡として有名ですが、鹿屋地域でも縄文早期には、上野原遺跡と同じような生活をしていたことが分かっています。

鹿児島県は、現在でも活発な活動を続けている活火山「桜島」を代表とするように、古くから火山やカルデラが活発な噴火活動を繰り返した様子が地層によって明らかになっています。近年、火山学の研究が進歩したおかげで、数千年前の年代もほぼ正確に把握できるようになってきました。

弥生時代の集落の跡も各地に見られ、稲作で使われた石包丁や弥生土器が発見されています。串良町の西ノ丸遺跡では、碧玉製の管玉やその玉類を作るときに使われた筋砥石も見つかっています。

吾平町の西側に立地する名主原遺跡からは、人間



名主原遺跡：絵画土器



王子遺跡：絵画土器

(武人)を表現した「^{かいがどき}絵画土器」が県内で初めて発見されました。また、王子遺跡からは、魚(イルカ?)を思わせる絵画土器も見つかっています。

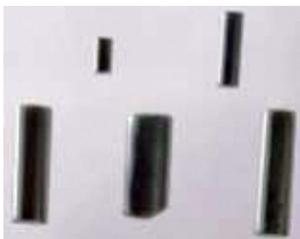
古墳時代の出土品で特殊なものは、もともとは馬の装飾品であったといわれる「鈴」です。銅製の鈴や鉄製の鈴などが見つかっています。特に串良町の立小野堀遺跡では10個の青銅製鈴が見つかっており、その中の2つが馬につける^{さんかんれい}三環鈴の一部であることも分かっています。また、人骨や鉄製の刀、剣、^{やじり}鏃なども見つかっています。



立小野堀遺跡人骨など



筋砥石



西の丸遺跡の管玉

アクセサリーのいろいろ

鹿屋市の遺跡からは、様々なアクセサリー類が発見されています。特に弥生時代や古墳時代の遺跡からは、ネックレスや耳飾り等が見つかっています。これらは現在でも高価な翡翠製や銅を金で塗ったものなどが見つかっています。

また、土器を作るのと同じ技法でネックレスのパーツを作り、それを赤い顔料で染めたものも見つかっています。

古代の遺跡からは、ズボンなどに着けるベルトのバックル部分も見つかっています。これらは、権威を表す為に身に着けたものと考えられています。さらに、それらのアクセサリーを付けていた人が飼っていた馬等にもアクセサリーを着けていました。それらが、馬具や鈴等です。



鈴(立小野堀遺跡)



「勾玉と管玉 岡崎15号墳出土」



短甲の破片



花崗岩製の石棺



須恵器の大甕

037

古墳から見つかった物

大隅半島には鹿屋市を中心に、前方後円墳や円墳、地下式横穴墓といった古墳時代の墓がたくさんあることが分かりました。それでは、それらの古墳からはどのようなモノが見つかったのでしょうか。岡崎古墳群や中尾地下式横穴墓群から出土した遺物を中心に紹介します。

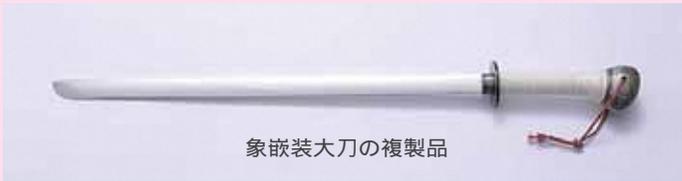
○岡崎古墳群から見つかった物

岡崎古墳群は鹿屋市串良町岡崎に所在し、串良川の河口に近い微高地びこうちにあります。岡崎古墳群は前方後円墳2基、円墳18基からなり、いくつかの古墳には地下式横穴墓が共存していることが分かっています。

そのうち15号墳ほたてがいしき（帆立貝式前方後円墳）の主体部からは、勾玉まがたま、管玉くだたま、短甲の破片が見つかっています。勾玉は県内で初めて見つかったそうです。その勾玉は新潟県糸魚川流域産のヒスイいといがわでできていると推測されており、当時の人々の交流の証となる大変に注目される出土品となっています。また、18号墳は、直径18.8mの円墳で、周溝（古墳の周りにある溝）部分から3基の地下式横穴墓が発見され、その内の2基は玄室まで調査されています。地下式横穴墓の間からは、お葬式などで使われたと考えられる多数の土器が見つかっています。なかでも地元は生産できなかった須恵器



象嵌装大刀の実物



象嵌装大刀の複製品



複製されたツバ



象嵌装大刀解体
親(深)書HP

が見つかったことで、大和政権との関わりが分かります。また、遺体を埋葬した玄室からは花崗岩製の石棺、U字形鍬鋤先、ピンセット状の道具や、銀の代用品だったと考えられる錫、イモガイ製の貝輪などが見つかりました。

○中尾地下式横穴墓群から見つかった物

中尾地下式横穴墓群(中尾遺跡)は鹿屋市吾平町に所在し、これまでに8基の地下式横穴墓が確認されています。その中で6号墓からは象嵌装大刀が見つっています。これは約1500年前の刀で「はばき」と「つば」の両面にハートの文様・切羽縁金具部分には、二重半円文の象嵌が施されています。ハート型に見える模様(心葉文)は、鳳凰が羽を広げた様子を表しています。

象嵌の施された大刀で一般に知られているのは、熊本県の江田船山古墳出土の大刀や埼玉県行田市の稲荷山古墳から出土鉄剣などがありますが、いずれも象嵌銘である点で、本市のものと異なります。象嵌が絵や模様を使ったものは、宮崎県の島内地下式横穴墓群の第114号出土の銀象嵌龍文大刀等がありますが、同じ心葉文は、大分県中津市三光村の上ノ原横穴墓群59号出土の大刀があります。心葉文が施された剣や刀は、出土例が全国的にも数十点と類例はあまり多くありません。このように、貴重な逸品であり、鹿児島県で1本しか発見されていない貴重な資料です。その他にも6号墓からは、鉄の刀や剣の他に、鍬、耳環、刀子、3人の古代人の骨(全て男性)も見つかっています。象嵌とは、装飾技法のことです。



絵画土器



須恵器のはそうと樽型はそう



たんこう しょうかくつきかぶと
短甲・衝角付膏



だこうけん
蛇行剣



国司城跡の碑



1961（昭和36）年の市制20周年記念で作成されたものです。

大隅風土記逸文

「風土記」とは、元明天皇の頃の713（和銅6）年、諸国に命じて撰進させたもので、地方の伝説、風俗、人情、物産などが記されたものです。しかしそれが散逸し、現在では、わずかに五つしか残っていません。しかし、鎌倉時代に仙覚が著した万葉注釈集の中に「大隅風土記逸文」が記されており、その中に串ト郷（くしらのさと）の貢が残されています。奈良時代風土記が編纂された頃には、この地域の人は今と変わらない地名で呼んでいたことがわかる資料です。

「鹿屋」の語源

「鹿屋」という地名の由来は大きく3つほどに分けられます。

- ① 熊襲の首長鹿文（かや）の名による説
- ② 大隅地方に多く生えた茅の名が「かのや」に転じた説
- ③ この地に鹿が多かったので「鹿屋」とする説
このような説が語源の説とされていますが、定かではありません。

038

中央と鹿屋市

○中央とは

当時の日本の政治の中心であった奈良地域のことです。当時（奈良時代）は、鹿屋市域を含む大隅半島地域のことを、大隅国と呼んでいました。

当時の鹿屋市は、肝属川流域の平野部や台地上に広がる平野部がある肥沃な穀倉地帯でした。このことから、大隅の国司である陽候史麻呂がたびたび鹿屋地域の巡検に来ていたことが解ります。巡検時には国司城（現市役所南側付近）を拠点に、高須地域まで巡検していたようです。この地域を治めることが、当時の中央政府に求められていたようです。

○大隅とは

字の字義（意味）については、「大」は接頭語の美称で、「隅」は末端、角の意があり、筑紫の南端であるという意味が含まれているともいわれます。

『鹿兒島神宮旧記』には、大隅のことを「大州見」と記しています。また、「大角」、「大住」とも記されており、当て字をしたものと考えられていますが、筑紫の南端の意味が妥当だと考えられています。



国司塚

○大隅国

713（和銅6）年に日向国きもつきから肝坏郡・曾於郡そお・大隅郡・始羅郡を分けて大隅国はできました。政治の中心に置かれた国衙・国分寺は、現在の霧島市国分に置かれました。

これには当時大和朝廷と抗争を起こしていた隼人の勢力を衰えさせる目的もあったと考えられています。

大隅国設置から10年間は大和朝廷による行政下で政治が行われていましたが、720（養老4）年に隼人が反乱を起こし、大隅国初代国司に任命された陽候史麻呂やこのふひとを殺害しました。これが後の隼人の反乱へと繋がることとなります。国司を襲った事件は、鹿屋地域の巡検中に起こりました。

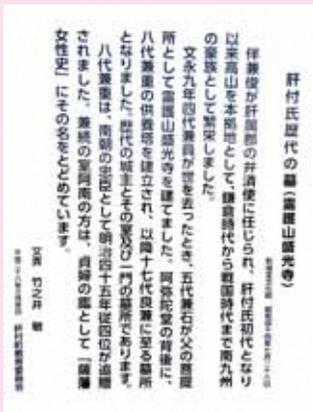
大隅国初代国司に任命された陽候史麻呂は、中国の皇帝「煬帝」の子孫にあたり、帰化人（帰化によってその国の国籍を得た者）です。帰化人を国司にしたことから、南九州と大陸との間に何らかの関係があったのではないかという説もあります。

国司塚

鹿屋市永野田町、旧国鉄の永野田町駅から左へぐると回ったところに、うっそうと茂った竹やぶの中に「国司塚」と呼ばれる石碑があります。

大隅国を設置する際、これを治めるために初代国司として陽候史麻呂を任命しました。伝説では、大隅国設置に反対した隼人が反乱を起こして、国司を攻めました。陽候史麻呂は部下と共に戦ったが敗れ、退き、永野田の地で息絶えたといわれています。

その場所が現在の「国司塚」であり、当時の戦死者を供養するための塚だといわれています。



肝付氏歴代の墓
(設置された看板)



肝付氏歴代の墓

大伴旅人・家持と肝付氏

720（養老4）年、大隅の隼人が大隅国司を殺害し反乱を起こします。その鎮圧を命ぜられたのが大伴旅人でした。旅人は征隼人持節大將軍に任ぜられ、1年半かけて制圧しました。

旅人の子が大伴家持です。家持は歌人としてたくさんの短歌を残し、日本最初の勅撰和歌集「万葉集」の編纂にも関わりました。薩摩守にも任ぜられています。

その大伴氏を祖先に持つのが肝付氏です。淳和天皇（大伴親王）が即位すると、その諱を避けて一族は伴と氏を改めました。その伴氏の一族が肝付氏を名乗りました。

039

肝付氏について

平安時代以降、薩摩・大隅・日向の三州各地に大きな勢力をもっていたのは肝付氏でした。

肝付氏は、5世紀ごろから中央で活躍した豪族の大伴氏を祖先に持ちます。大伴氏といえば、旅人・家持親子が有名です。その後、大伴から伴に姓をかえ、後に肝付氏を名乗るようになりました。

平安時代の半ば968（安和元）年、太宰府の役人だった伴兼行は薩摩国総追捕使に任ぜられると、薩摩国にやってきました。このころは鹿児島市の伊敷のあたりに屋敷があったそうです。その後、孫の兼貞は肝付郡の弁済使に任ぜられると、高山に移住しました。こうして本拠地を大隅に移した伴氏は勢力を拡大していきます。その一番の要因は、荘園の管理をするためです。島津荘は薩摩・大隅・日向の半分以上を占める広大な荘園でした。太宰府の役人だった平季基が日向国諸県郡の島津院を中心に開発した荘園で、兼貞はこの平季基の娘（あるいは季基の子の娘）と結婚し、島津荘の別当職を譲り受け世襲するようになりました。こうして大隅の役人として、そして島津荘の壮官として大きな勢力を誇るようになったのです。

その後、兼貞の子、兼俊は在地の地名を取って肝付氏を名乗るようになり、肝付氏一族は、その後たくさ



肝付氏の本城「高山城」跡



高山四十九所神社の流鏝馬

写真提供：肝付町

んの分家に分かれ、日向や大隅だけでなく北薩を中心に薩摩にまで勢力を伸ばしていきました。こうして以後約600年間にわたって大隅に大きな勢力をもつ肝付氏が誕生しました。

ところが、中央で平氏が滅亡すると、島津荘は源氏方の鎌倉幕府に没収されてしまい、肝付の地のみが保障されました。島津荘には、幕府の御家人、これむねのただひさ惟宗忠久が地頭として派遣され、忠久は薩摩国・大隅国・日向国の守護職に任ぜられました。そして忠久は島津荘を本拠地に定め姓を島津と改めました。

高山を本拠地に依然として大隅に力を維持していた肝付氏は、このあと島津氏に従うまでの約400年間、島津氏と三州の領有を巡って争いました。

島津氏の家臣となった肝付氏は、大隅の領地を没収され、大隅における肝付氏は滅亡してしまいます。しかし新たに喜入に領地を与えられ、いっしょもち一所持というかかく家格で厚遇こうぐうされます。この喜入肝付氏からは、のちに、明治維新で活躍した小松帯刀たてわきが出ます。帯刀は小松家の養子で、元は肝付氏の生まれでした。

やぶさめ 流鏝馬

10月の第3日曜日に肝付町高山の四十九所神社で毎年流鏝馬しじゅうくしよ祭りが行われています。四十九所神社は、肝付氏の祖である伴兼行が創建したといわれています。伴兼行の孫、伴兼貞が1036（長元9）年に肝属郡の弁済使になっていますが、高山で流鏝馬が始まったのはそれから100年位後になるようで、900年近い歴史があります。



写真提供：肝付町



上は「熊襲の穴」
右は「隼人塚」

写真提供：霧島市



岩川八幡神社の弥五郎どん祭り

写真提供：曾於市

くまそ はやと 熊襲と隼人

古代の南九州には、中央政権に従わない部族が住んでいて、「熊襲」や「隼人」と呼ばれていました。

熊襲は、日本書紀や古事記に登場します。酒に酔った熊襲の首領兄弟を女装したヤマトタケルが討った話は有名です。そのときの場所であるといわれている「熊襲の穴」が、霧島市隼人町には残されています。

隼人も熊襲と同じように中央政権に従わない人々でした。しばしば反乱を起こしましたが、「隼人の反乱」を最後に、服従しました。隼人の霊を慰めるために建てられたといわれる「隼人塚」が霧島市隼人町には残されています。また、朝廷の前で相撲を取った隼人として大隅隼人は知られています。相撲に勝った大隅隼人は朝廷から厚く用いられ中央に土地を頂いて、住み着いた地が、現在の京田辺市大住とされています。

040

荘園、鹿屋の統治

荘園とは、8世紀から16世紀に存在した、中央の公家や寺社、武家といった権門・貴族による土地の領有形態を指します。律令制のもとでは個人による土地の領有は認められていませんでしたが、時代とともに律令制は形だけのものになってしまい、私的な土地（荘園）が全国に広がっていきました。

鹿屋を含む大隅地方には、713（和銅6）年に日向国から分国して大隅国が設置されました。このとき鹿屋市の大部分は始羅郡・大隅郡となりました。しかし、この頃の南九州は隼人の全盛期で、中央政権の力が及ばない半独立の状態であり、「隼人の反乱」と呼ばれる大きな反乱もありました。これは、大隅国の国司を隼人が殺害した事件ですが、その舞台となったのが鹿屋市永野田町のあたりだといわれています。このように大隅は隼人の力が強い地域でした。この反乱の鎮圧を命じられたのが、後の肝付氏の祖となる大伴氏の大伴旅人でした。この反乱の制圧後、大隅も中央政権の支配に組み込まれていきました。

しかし、平安時代になると全国に荘園が広がっていきます。鹿屋も薩摩・大隅・日向に広がる島津荘という大きな荘園の一部に組み込まれていました。島津荘



奈良～平安朝中期ごろの大隅の行政区画想像図



島津荘大隅方支配図（鎌倉初期）

弥五郎どん祭り

毎年11月3日に曾於市の岩川八幡神社で弥五郎どん祭りが行われています。これは720（養老4）年、隼人の反乱を朝廷軍は鎮圧しましたが、この時、隼人の戦死者があまりにも多かったので、慰霊のため放生会ほうじょうえを行ったのが始まりとされています。弥五郎どんのモデルは、朝廷に抵抗した隼人族の首領とも、朝廷側の竹内宿禰たけのうちのすくねともいわれています。岩川八幡神社の他に、都城市と日南市にも弥五郎行事が伝えられています。



は、太宰府の役人だった平季基たいらのすえもとが日向国諸県郡の島津院を中心に開発した荘園で、摂関家を領家として寄進して、その後薩摩・大隅・日向に大荘園が広がっていきました。鹿屋も大部分がこの島津荘に組み込まれていますが、吾平や輝北の一部は大隅正八幡宮領と分かれています。大隅では、国衙こくがの役人たちが在地化し、荘園の荘官にもなって勢力を伸ばし、領主となっています。そのうちの一つが肝付氏です。鎌倉時代には荘園の支配とは別に、大隅には北条氏が守護・地頭に任じられ、次第に荘園は在地の領主の私領となっています。この中で肝付氏は島津氏に対抗する力を身につけていきました。鹿屋も肝付氏の一族である萩原氏や鹿屋氏が支配していました。

肝付氏による支配が終わるのは戦国時代で、長く対立していた島津氏に敗れ、300年間にわたり鹿屋を支配していた鹿屋氏も鹿屋を追われました。この後大隅は島津氏の支配に組み込まれ、鹿屋も島津家家臣の伊集院氏や垂水島津家に支配されました。



三州割拠図
串良町郷土誌から転載



おなみごせん
阿南御前の墓

げんこう

元弘の乱と肝付氏

足利尊氏は一度都での戦いに敗れ、九州に逃れるが、迎え撃ったのが菊池氏で、菊池氏を応援したのが肝付氏でした。この戦は尊氏が勝ち、尊氏は菊池氏、肝付氏をひどく憎みました。菊池氏の所領を二木、一色氏と与え、肝付、伊東氏の所領を禰寝氏、執印氏に与えて、畠山直顕を日向の守護職におきました。これが肝付氏の没落のはじまりでした。1337（延元2）年、尊氏は勢いを盛り返し、今度は後醍醐天皇が九州に逃げました。「旧記雑録抄」によると指宿に上陸した可能性が高い。その時、菊池氏、肝付氏が後醍醐天皇を助けて、足利軍を打ち破り、錦旗を賜ったと記録されています。



南北朝時代各氏動向図

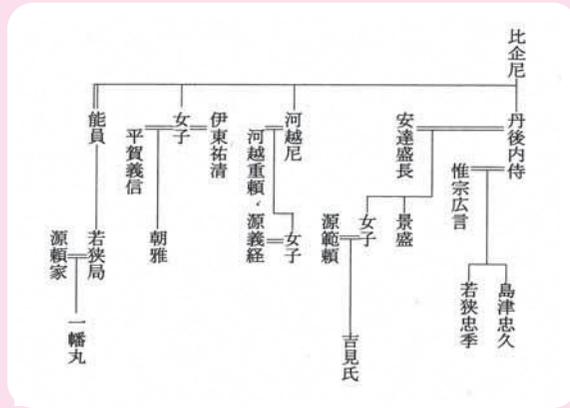
041

肝付氏の支配から島津氏へ

元弘の乱において島津氏と肝付氏はともに後醍醐天皇を応援しました。島津はその功績により、薩摩国に加えて、失っていた大隅国、日向国の守護職を賜りました。しかし、3年も立たぬうちに足利尊氏が反乱を起こし、島津氏は足利氏につき、肝付氏は後醍醐天皇につきました。熱心に後醍醐天皇を応援していた肥後（熊本）の菊池氏と肝付氏は都から逃げてきた足利軍に大敗しました。島津貞久は1336（延元元）年5月、肝付家当主兼重の甥、肝付兼隆のおさめる百引の加世田城を攻撃し、島津対肝付の正面的な戦いが始まりました。加世田城は陥落し、肝付兼隆は討ち死にしました。島津軍は高城を攻めましたが、肝付氏が島津氏をしりぞけました。1343（興国4）年には、島津貞久は一度宮方に降伏しました。実はこれは宮方について日向、大隅を手中に収めた同じ武家の畠山直顕への牽制だったという説もあります。一時は大いに勢威の上った宮方もやがては衰え、肥後に落ち延びることとなりました。畠山氏は禰寝氏に鹿屋を攻めさせました。畠山氏の勢いは止められず、大隅も次第に畠山氏の傘下に下ろうとしていました。ところが事態は意外な方向に動き、宮方として奮闘していた菊池武光が1359（正平13）年、宿敵である武家方畠山直顕を攻め、2年間



しまづただひさ
島津忠久像



島津忠久関係略系図

串良町郷土誌から転載

で滅ぼしました。島津氏は一兵も失うこと無く、再び日向、大隅、薩摩三国の鎮護としての重きをなすことになりました。また、畠山氏が滅びると、島津氏はもはや宮家の庇護はいらぬとばかりに武家に轉身し、足利家の傘下に入りました。元弘以来宮方のために力を尽くした伊東由祐は戦死し、野辺氏も衰え、島津氏の抵抗勢力は肝付氏だけになりました。島津義久が島津氏の家督を継ぐと、北郷時久に肝付氏を攻略するように命令します。この時、肝付氏の当主は肝付兼亮でした。島津義久は大隅半島南部に支配を広げていた禰寝重長を味方につけ、北郷時久とともに高洲浦（現鹿屋市）で大小の舟を奪うなど知略をもちいて、肝付氏を攻めました。肝付氏は牛根城（現垂水市）を失い、廻（現霧島市）と市成（現輝北町）を島津氏に差し出し降伏しました。しかし、島津氏は執拗に肝付氏の領地を奪い、最終的には高山、吾平、内之浦、岸良の支配のみを認められ、最後には高山以外のすべての領地を没収され、1580

（天正8）年に薩摩国日置郡阿多（現南さつま市）に領地替えをされて、肝付氏は大隅半島からその姿を消すこととなりました。

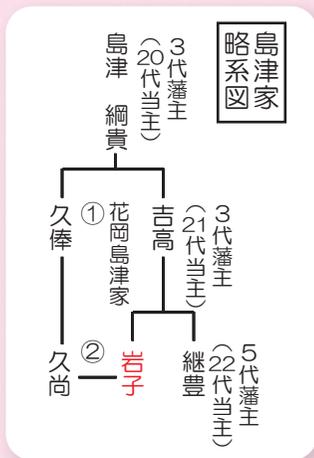


高山城跡

肝付氏の衰退と滅亡

元弘の乱終盤の大隅の状態はというと1339（暦応2）年、日向高城では肝付兼重が畠山直顕と戦い、鹿屋地方では禰寝氏の庇護下にあった武家方の大始良一族の勢力が強く、鹿屋氏を常に圧迫していました。その中であって、肝付氏当主兼重の弟、兼成は根占地方からの出口に当たる枢要の地であり、肝付氏の本拠である高山の地を死守していましたが、禰寝氏、横山氏の連合が攻め落としました。

兼成討死を契機に、肝付氏の勢力は大始良から急速に後退し、代わって志布志にあった楡井頼仲の勢力が一気に鹿屋、大始良、花岡、高隈方面に進展し、また徐々に島津の勢力も大始良を足がかりとして伸びてくるようになった。



花岡島津家墓地（真如院跡）

どん海庵

「どん海庵」とは、日本百僧の一人に数えられる名僧の玉山和尚という僧が建てた庵です。正しくは「呑海庵」と表記します。

玉山和尚は鎌倉時代末期、2回中国に渡り、2回目の帰国の際に暴風雨のため鹿屋市浜田町の海岸に漂着しました。そして海岸近くに「どん海庵」を建てて住んでいたそうです。

その後大始良城主の※榎井頼仲の招きにより、大始良城下に「竜翔寺」を建立して初代住職となりました。「竜翔寺」は鎌倉末期に建てられた、この地方で最も古いお寺です。

また榎井頼仲が戦いに敗れ、志布志に去ったので玉山和尚も志布志に移り「大慈寺」を創建しました。「大慈寺」は、室町時代の臨濟宗寺院で高い格付けをされたお寺の1つです。

※南北朝時代に南朝方として、大隅国で一時期活躍した武将です。

042

島津氏と鹿屋市の関係

島津氏と鹿屋市の関係について、花岡島津家の存在を抜きに語ることはできません。

○花岡島津家とは

江戸時代中期の1724（享保9）年6月、3代薩摩藩主・島津綱貴が次男の久儔に大始良郷内の木谷村などを与え、翌1725（享保10）年7月には、木谷を花岡と改めて花岡島津家を興させたことに始まります。

久儔より、7代の久敬に至るまでの145年間、薩摩藩の外城（とじょう・周辺の支城のこと）としての役割を果たしました。

花岡島津家初代久儔から9代久基が眠る墓地は、男性と女性の形式を区別した特色のある墓地で、鹿屋市にとって貴重な文化財として、1981（昭和56）年に市の指定文化財に指定されています。

○島津岩子夫人による用水路建設

花岡は昔から水に恵まれず、飲料水はもちろん、田地の灌漑にも困り、よく旱魃が起こる土地でした。開墾の意思を示した初代・久儔でしたが、実現できないまま1729（享保14）年世を去ります。



島津岩子の碑

久儒の跡を継いだ花岡島津家2代目久尚の夫人である岩子(5代藩主・島津継豊の妹)は、領民たちの長年の水不足に心を痛み、1773(安永2)年9月、飲料水供給や灌漑対策を兼ねた用水路建設の大事業を敢行しました。

高隈山麓の清流を引き、水量が豊かな高須川上流の堤防を修築。山腹を開け、数か所の隧道を設置し、1里(約4km)以上の用水路を整備する難工事でした。

領民たちもその重い任務に応え、1780(安永9)年10月に7年以上かけて、ついに用水路を完成させました。これにより20町歩以上(東京ドーム約4倍の広さ)が開田し、その後も次々に新田が開かれていきました。

岩子は温厚で、学を好み、書や琴をたしなむ女性で領民から尊敬されていたと伝えられています。1962(昭和37)年10月、鹿屋市は岩子が行った用水事業を顕彰するため、旧鶴羽小学校裏の木谷城跡(鶴羽城山公園)に碑を建てました。

1町 = 約9,917.36m²、m法では約100a(1ha)

海賊の話

日本の歴史において海賊と聞くと「倭寇」をイメージする方も少なくないのではないのでしょうか。

「倭寇」というと13世紀から15世紀にかけて、朝鮮半島や中国大陸の沿岸部などの地域において活動した日本の海賊です。

この鹿屋の地も「倭寇」との関わりが深い場所がいくつかあります。

高須町

中国、明の時代の日本研究書『日本一鑑』には、倭寇に連れ去られた中国人たちが奴隷として酷使・売買された施設が九州の「高洲」という場所にあると記録されている。

波見町

肝属川河口付近は、古くから交易と漁業の拠点であった。中世には「倭寇」の拠点としても伝えられている。

本コラムでは「前期倭寇」のこと指します。



亀鶴城址



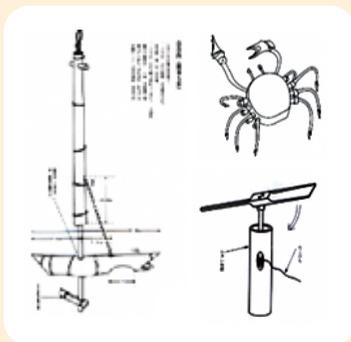
鹿屋城跡：現在の城山公園

伝統工芸「竹細工」

竹材は、そのしなやかで折れにくい性質から、今のように合成樹脂製品が一般的でない時代によく使われていた素材です。

最近では、あまり見かけなくなりましたが、箆やザルが鹿屋市全域で盛んに作られ、竹屋等とよばれるお店がつい最近までありました。

そのような竹細工がどのように作られていたかを現在に伝える本が、鹿屋市立図書館で閲覧できるので是非見てみてください。



楽しい竹細工美と強度を求めてより転載

043

鹿屋市の城跡1

鹿屋市には、自然の地形などを利用した山城が多く残されています。山城は居住空間を持つ平城とは違い、普段は麓と呼ばれる城下に居住し、戦乱の時だけ城に入りました。ここでは、輝北地域と鹿屋地域の山城を紹介します。

○高雲加瀬田ヶ城（鹿屋市輝北町平房）

肝付氏の居城である高山城の支城で、三俣（肝付兼重）の中間に位置し、戦略並びに連絡上非常に重要な城でした。この城は、南北朝から戦国期に使用され北側はシラスの絶壁、東南側は急斜面、両側は空堀がつくられ、場内には井戸があり、攻めるに難しく、守りに易い城でした。

○鹿屋城（鹿屋市北田町）

別名を亀鶴城といいます。鹿屋市街地の隘路にせまる火山灰台地の突端をたくみに利用した山城です。

城郭は本丸、二之丸、中城、松尾城、大明城、今城、取添城などに分かれ周囲およそ2 km、大手口は南面にあり、いまの大手町の地名を残しており、両面の水濠は現在、駐車場、公園となっています。

この城の始まりは「古城主由来記」に「島津久経時代津野四郎兵衛、鹿屋城主」とあるのでだいたい鎌倉時代承久年間頃と思われます。



大始良城跡

天正6年肝付氏没落後、伊集院忠棟により肝付地域の中心として本格的に築城された中世末から近世初頃の城郭です。

○大始良城（鹿屋市大始良町城内）

大始良城は平安末期の寿永年間頃から^{ねじめ}祢寝小太郎義明が築城し、その後は南北朝期には、^{ゆい}楡井氏や島津氏と主を変え、戦国期には肝付氏の支配となりました。

内城を中心として十二城から成り、その規模は肝付氏の高山城をしのぎます。大始良川の二つの川筋に^{からほり}囲まれ多くの空堀、^{どるい}土塁、^{うし}柵型等が現存し中世山城の典型的なものといえます。

○西原城（鹿屋市輝北町上百引）

別名舞天城ともいいます。図師家二十代にわたり、434年間も居城したところで、高山（肝属郡高山町）の本城（肝付氏の居城）と連絡をとり北朝系（島津勢）や外敵の襲来を監視し、万一の折は「^{のろし}狼煙」で急を高山へ知らせた肝付北辺の監視城として貴重な城でした。

図師家は、1181（養和元）年から1615（^{げんな}元和元）年まで百引を支配し、南朝系として活躍しましたが、後に島津氏に帰服しました。

高隈の刀鍛冶

高隈町重田の松尾城の西方、高隈川（串良川）を渡って田圃の中に鍛冶場の後があります。戦国時代文亀年間（1501年～1503年）のころから江戸期寛政（1789年～1800年）のころまで刀工がいたとされます。重包 - 重鎌 - 重鏡 - 重吉 - 重近など五代が伝えられています。

高隈刀には次のような話があります。三代重鏡が当時の名将から刀の注文を受けましたが、どうしたとか約束の寸法（長さ）と異なるものを作っていました。その大将が厳しく問いただしたところ重鏡は、「私は耳が遠いので寸法を聞き間違えたのだらう」と、答えました。それから三代重鏡作の刀の銘を「高隈つんぼ」と呼ぶようになりました。



鶴亀城跡（串良城跡）



長谷城跡



城ヶ崎城跡（小原城跡）

鶴丸城建設こぼれ話 （城つながり）

別名を鹿児島城といいます。城の地形が鶴が羽を広げた様子に似ていたからと鶴丸城とよばれました。

もともとは南北朝時代のころ上山氏が造った上山城で、山城でした。

島津氏は戦国時代、内城（大瀧小学校）を居城にしていましたが、関ヶ原の戦いで敗れ徳川氏の脅威に備えるために、1601（慶長6）年に、島津家久の命で建設が始まりました。建設にあたり、家久の実父義弘は海岸線に近いことから反対し、内城の前に居城としていた清水城（清水中学校）や帖佐建昌城（始良市）なども候補地に挙がりました。家久は広大な城下町建設を考えており、その主張通り築城が始まりました。その後徳川家康から本領を安堵されたことから、恭順の意思表示として、天守閣を作らず、屋形づくりとし、後詰め^{ちしろ}の城として上山城を城山とした平山城^{ひらやま}になりました。1606（慶長11）年に家久が内城から鶴丸城へ入城しました。

044

鹿屋市の城跡2

鹿屋市の城跡2では、串良・吾平地域の山城について紹介します。

○鶴亀城（串良城）

串良城ともよばれ、現在の串良総合支所あたりにありました。応永（1394～1428年）の末期ごろに島津家の重臣平田重宗によって築城されました。1520（永正17）年には肝付氏が鶴亀城を包囲しましたが、城代の平山近久が退けました。1523（大永3）年には新納・肝付連合軍により攻められ、翌4年から1577（天正5）年まで肝付氏の領地となりました。肝付氏の降伏後、1576（天正4）年に島津忠長が串良の地頭に任ぜられ、在城しました。8郭からなる大きな城で、巨大な空堀がありました。

○長谷城

祓川にあり、鎌倉時代か南北朝のころに築城されたといわれています。鹿屋川に接する小丘^{しょうきゅう}を利用して造られ、高いところで45mぐらいであったと思われます。ここは鹿屋に入る北の関門として軍事的にも重要であり、近くにある一ノ谷城とともに数々の激戦があったと伝えられています。現在は、シラスの採取場となり跡地は消滅しています。



末次城跡



筒ヶ迫城跡



鶴丸城跡で発見された花十字紋瓦

写真提供：鹿児島県立埋蔵文化財センター

○城ヶ崎城（小原城）

小原城ともよばれ、上小原の城ヶ崎にあります。南北朝のころに松崎氏によって築城されました。この城は、肝付氏に対抗するために近くの松崎城の出城的な役割として造られ、だんだんと整備されたものと推測されています。

○末次城

吾平川と鹿屋川の合流地点の近くの吾平町下名井神島にあり、末次家の子孫が代々居住していたと伝わっています。1351（正平6）年に禰占清重が攻め落とすと記録があるので、それ以前に築城されたと考えられます。その後肝付氏、楡井氏、畠山氏に支配されました。このころまでは井上城と呼ばれていました。1357（正平12）年に末次城と改称されました。1361（正平16）年に島津氏が攻め落とし、重臣の山田忠経を城主としました。南北朝時代に激戦地だったことが分かります。

○筒ヶ迫城

吾平と苦野川が合流した筒ヶ迫にあり、室町時代に築城されたと言われています。肝付氏の老中級の肝付兼清が1555（天文24）年に地頭として移り住んだといわれています。

肝付氏が島津氏に降伏後、吾平は島津氏の直轄地となり、地頭として伊地知重秀が1577（天正5）年に筒ヶ迫城に赴任しました。

海岸に近すぎる防衛上弱点があり、1863（文久3）年の薩英戦争では、鶴丸城は艦砲射撃の射程圏内だったために本陣は別の場所に移しました。実際に、城には砲弾が撃ち込まれていません。1871（明治4）年の廃藩置県で島津忠義が去るまで、270年余り島津氏の居城として、薩摩藩の中心でした。

本丸や御楼門は1873（明治6）年の火災で、二之丸は1877（明治10）年の西南戦争で焼失しました。現在は本丸跡に鹿児島県歴史・美術センター黎明館、二之丸跡には鹿児島県立図書館、鹿児島市立美術館、鹿児島県立博物館などが建っています。大手門にあたる御楼門は、2020（令和2）年に復元されました。発掘調査で、キリシタン建築に使用された「花十字紋瓦」が見つかりました。家久の義母、永俊尼がキリスト教の信者で、関係があるのではないかと推測されます。



現在も残る麓の武家門1（吾平）



現在も残る麓の武家門2（吾平）

のまち 野町観音 (市指定文化財)

鹿屋市吾平町の野町は、町の十文字から南方向に（現在の上町・中町地区）ありました。十文字の角（元桐野シューズショップの角）にえびす様が祭られ、西側の角に野町観音様（総高約123cm）が祭られていました。この観音はやがて野町観音と呼ばれるようになりまし。この観音は、その後十文字周辺の交通量が多くなり、危ないので、戦争後、鶴戸神社へ移されました。野町は観音様を中心に集落が作られています。吾平町は、1681（延宝9）年、（約320年前）には、26戸ほどあったと伝えられています。



野町観音

045

野町・浦町・麓について

麓は、諸外城における地頭仮屋（直轄領の呼称）もしくは領主仮屋（一所地の呼称）および郷土年寄所・与頭役場・触役所・部当々役所などの諸役所や祈願所・菩提寺・射場・宗社などの施設が整い、外城衆中（郷土）の屋敷が集住している行政・軍事文化・経済の地方の中心地にあたります。（古前城町や打馬、吾平、串良、大始良、花岡、高隈など）

野町は、内陸部の交通の要地にあった藩公認の商人町や商業地のことをいいます。ほとんどが麓に隣接していましたが、もとは岡町とも呼ばれていましたが、1711（正徳元）年に野町と改称されました。薩摩藩は、自給自足を原則としていたので、野町といっても町人は半農半商のくらしで、町屋の戸数も数戸程度のところが多かったそうです。



現在も残る麓の武家門3（吾平）



現在も残る麓の武家門4（吾平）



現在の野町（吾平）

郷士の村

漁師人 =

浦町

在
(百姓)

麓

= 郷士

在
(百姓)

野町

= 町人

浦町は、町場のある漁村のことです。漁村だけなら浦、それより小さいと半浦とっていました。浦町の商人は、商業・海運を営業とし、水主^{ぶえき}賊役を一般には負担し、一部の者はその営業について運上銀を上納したり、六反帆以上の大船持ちは御用船もつとめていました。元来薩摩の漁業生産力はふるわなかったのに、貧弱な漁業生産力を“高”結ばずに、平時にあっては海上賊役、戦時にあっては水軍^{すいふん}夫卒としての“水夫奉公”の徴収を目的としていました。藩財政の生命線は、上方および琉球列島の物資や貿易にあったから、浦町の果たす役割は非常に大きかったと考えられています。（高須町、古江町）

肝付郡の外城の概要

直轄領	郷士総人口(人)	所総高(石)	村数	用夫(人)	野町用夫(人)	浦方用夫(人)	備考
串良	429	18,024	10	2,071	32	328	大郷
高山	548	11,409	7	1,263	96	88	大郷
始良	179	7,045	3	792	41	—	中郷
大始良	243	7,487	7	1,111	—	—	中郷
鹿山	359	9,826	4	1,356	76	82	中郷
内之浦	99	4,482	3	403	—	332	小郷
高隈	99	3,074	2	247	—	—	小郷
一所在地	郷士総人口	所総高	村数	用夫	野町用夫	浦方用夫	
花岡	348	1,583	2	326	56	95	
垂水	1,669	6,723	9	470	—	391	

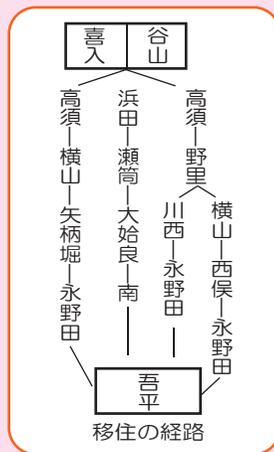
麓について

勇猛果敢な薩摩武士を育んだ地、鹿児島県。江戸時代、鹿児島（薩摩）藩の地方支配の中心地のことをいいます。

鹿児島藩では家臣団の城下町集住が完全に行われず、身分的には武士ですが日常は農業に従事し、外城^{とじょう}衆^{しゅう}と呼ばれる郷士が在村していました。これは、外敵からの攻撃に備え、本城である鹿児島城^{とじょう}を中心とし、県内各地に外城を配置し、武士団を住ませることで、本城を守る役割を担わせていました。これら郷士の居住している地域が麓と呼ばれています。また、外城制度と呼ばれ、鹿児島藩独自の体制でした。

麓は、防御に適した場所に作られ、門と玄関の間に生垣を配置する等、まるで城のような構造を持っていました。そこでは、武士達が心身を鍛え、農耕に従事し、平和な時代でありながら武芸の鍛錬等に励みました。

現在も本市に残る麓地域を歩けば、江戸時代の武士達の往時の生き様が見えてきます。



にしめ
西目 (薩摩半島) から
ひがしめ
東目 (大隅半島) への
移住

江戸時代初期 (1660年ごろ) から幕末末期まで、薩摩藩では、薩摩半島 (西目) から大隅半島 (東目) に人を強制的に移動させて、農耕をさせる政策をとりました。この政策を「人配」 (「にんべ」 または「にんばい」) といいます。

移った人々を「永代移者」と呼び、門 (かど) の籍に入れました。門とは、農民を数軒から多くても20軒程度のグループに分けて支配する制度です。そのグループには地名などからとられた門名という名前が付けられました。

移住した人の中には職人として薩摩半島から出稼ぎに来て、そのまま定住した人もいました。大工、左官 (建物の壁を作る人)、木挽 (製材)、桶、鍛冶、紙すき、瓦などの職人が薩摩半島の各地から大隅半島に came。 (職人が出稼ぎに来たのは、大隅半島の人たちは農業以外の職につけなかったからです。)

046

にんべ
鹿屋・吾平・串良 人配物語

薩摩藩は1655~1673 (明暦~寛文) 年のころから吾平・串良・祓川など鹿屋の各地で新しい用水路を作り、新田を開発していきました。そのためたくさんの方が必要なことから、薩摩半島からくじを引かせて、強制移住させました。 (左コラム) 始良郷の記録では、開発が進むにつれ門の創設が増えています。「門割制度」 (右コラム) を確立するためにも、薩摩半島から強制移住させる「人配」を行いました。

この当時、大隅半島では「牟田田」とよばれ、常に水がある泥沼の田が多くありました。ぬかるみはひどく、浅いところで腰まで、深いところでは胸までつきり、田植えには「田下駄」を用いていました。

江戸中期以降、薩摩藩では「八公二民」と税率が高いこと、前述のような田で作業が大変なこと、災害や飢饉などの理由で、土地から逃げ出す農民も多くなり、つぶれた「門」も出てきました。このように人口の減少と農村の荒廃が激しかったので、「門」を維持するためにも継続的に人配が行われました。

江戸時代の後期になると、知り合いをたよって個人的に移住したり、定着した人が知り合いを呼び寄せたこともあったそうです。



始良郷下名人配・永代移者顕彰碑

郷——村——方限——門——
 (郷土) (庄屋) (名主) (名頭) (名)
 年寄 (年寄) (名頭) (名)
 郷のしくみ

移住してきた人の出身地は、加世田、田布施（南さつま市）、谷山・喜入（鹿児島市）、伊集院、伊作（日置市）、市来・串木野（いちき串木野市）、甑島（さつま川内市）と記録が残っています。

経路は、谷山・喜入から藩の船で出発し、高須か浜田の浜に上陸して、瀬筒峠を越えるルートと野里をこえるルート、霧島ヶ丘・横山を経由するルートがありました。瀬筒峠は移住してきた人が薩摩半島を望むことができる最後の場所だったので「人配峠」と呼ばれています。そこから大始良・南・吾平と進む道を「人配街道」と呼びました。霧島ヶ丘・横山を経由するコースの峠の坂を「干石坂」と呼びました。この峠から出身地の薩摩半島とこれから住む大隅の平野をながめることができたといわれています。この峠には、今は残っていませんが、大きな「三本松」がありました。

移住者には成年男子一人につき6か月分の食糧、斧、鋤、鎌を一丁ずつ、家族6か月分の食糧、種子、牛馬、住宅が与えられました。人配の人たちはそれぞれ決められた門に入り、用水路開拓、新田開発などに努めました。

人配、永代移住者の苦労と功績、感謝の意を伝えるために、1997（平成9）年に吾平町下名の吉田橋付近に「始良郷下名人配・永代移者顕彰碑」が建てられています。

（江戸）島津氏の政策

薩摩藩は外城制度で支配し、鹿屋に鹿屋郷・高隈郷・大始良郷・花岡郷・始良郷・百引郷・市成郷・串良郷が設置されました。各郷は地頭と呼ばれる役人によって治められ、地頭が居住する場所を地頭館・地頭仮屋と呼んでいました。花岡郷と市成郷は島津本家の分家である、花岡島津家と土岐家の私領となっており、地頭は置かれず、領主が直接治めていました。

郷の中にいくつかの「村」があり「庄屋」が任命され、村の政務を行っていました。各村は複数の「方限」に分かれていてその長を「名主」といいました。「方限」はいくつかの「門」から成り立ち、その長を「名頭」または「乙名」と呼びました。「門」には、数軒の農家が属していました。

薩摩藩は、年貢や夫役の徴収などの農民支配は「門」単位で行われました。

このような薩摩藩の農民の支配制度を門割（かどわり）制度とよんでいます。



なんしゅうおうしゅうくはくち
西郷南洲翁宿泊地の碑（鹿屋市高須町）

○西郷隆盛は年に数回、鹿屋の高須を訪れこの地を基地にして、近くの山野や高山・小根占・大根占などへも出かけ、狩りをしていました。

古江港、高須港の西南戦争の様子

官軍は、軍艦数十隻で高須下浜に上陸し、糧米、酒樽、砂糖、餅、鯉節を運び、高須の120戸ほどの民家に宿をとったといひます。

住民は山に隠れたりしていましたが、高島少将は安心して家に帰れと呼びかけたため、帰宅したといひます。



大始良城、高隈城、串良城に官軍陣地

官軍は志布志・串良・鹿屋・高隈・百引という戦線を敷き、高隈へと本陣を進めていきました。鹿屋での西郷軍と官軍の戦いは、地理的優位を生かした西郷軍の優勢に始まり、官軍は援軍を招集してなんとか西郷軍を撃破していきました。

047

にしはらじょう 西原城の攻防と明治10年の戦い

○西南戦争（明治10年の戦い）

1877（明治10）年の初め、私学校の生徒たちの暴発を発端に、西南戦争が始まりました。西郷隆盛率いる西郷軍は2月14日に、前衛別府晋介率いる二個大隊の先発を皮切りに全軍1万5千の兵で熊本に進み2月21日に熊本城兵と戦闘を開始しました。4月14日背面からの官軍の襲撃により西郷軍はついに破れ熊本城の包囲を解きました。

その後、6月1日人吉、6月20日大口、7月11日飯野に敗れ、形勢は日に日に縮まっていきました。特に、田原坂たばるざかの敗戦を契機に敗走、転戦しながら鹿児島に帰り、城山（鹿児島市）での西郷らによる自害をもって西南戦争は終わります。今も、伊佐市大口の高熊山たけいせきや霧島市牧園町の山間部に壘跡が残っています。

官軍は、鹿屋にも陣をしいて西郷軍と戦いました。7月1日に官軍の高島少将は司令部を高須に置き、同日、上野少佐は串良を攻め砲弾を撃ち込んで鎮圧し、志布志に防塁を築きました。この串良での戦いの砲撃の激しかった痕跡は、今も串良総合支所前の地頭館仮屋跡（市指定文化財）に残っています。

このように官軍は志布志・大崎・串良・鹿屋・高隈・百引という戦線を敷き、高隈へと本陣を進めていき



官軍が駐屯していたとされる西原城跡地（鹿屋市輝北町百引）

ます。一方、西郷軍の主将村田新八は、岩川・末吉・大崎・百引方面を左翼、財部方面をもって右翼とし福山・清水方面を中央として都城を根拠地とし決戦を挑みます。

7月5日に百引の麓に進軍してきた官軍は、一個大隊半司令官は古川少佐でした。同日午後11時ごろ、西郷軍の約400名は、牛根村二川にある官軍警戒線を守る加藤・山形中隊と激戦となり、官軍は三度敗れ援軍を百引に求めましたが、百引は、西郷軍の急襲を受けなかなか援軍を出せなかったと記録にあります。また、7月7日には、都城の西郷軍より、振武隊を主とし、奇兵隊を応援させ午後10時、恒吉から西郷軍の両将振武隊長中島健彦、同官軍貴島清は、振武隊十四個中隊を率いて8日午前7時半、輝北町宮ヶ原・中平房を潜行し、三隊に分かれて進軍し、一弾も発せさせずに前段、茶屋之元、本田氏上の丘を占拠しました。その後、官軍は、西原城に西郷軍がせまるのを察して、山頂に兵を集中させながら、さらに一隊をその左右に配して防戦に努めましたが、西郷軍の精鋭部隊に歯が立たず市成に援軍を求めました。しかし市成も西郷軍の精鋭部隊と交戦中で援軍が出せず、西原城にいた官軍は散り散りになりながら高隈の本営に逃げ帰りました。この時午後4時のことでした。この戦いは、西郷軍の大勝利でした。

官軍は戦況の不利を覆すべく、鹿児島から援軍を求め、援軍が高須から上陸し、各所で西郷軍を破り、7月24日には都城を占領して、大隅方面の戦局の大勢を決しました。

西原城の攻防の結果

この戦いは、西郷軍の大勝利でした。

死傷者 官軍 95人
西郷軍 10人

西郷軍の戦利品

金貨1,648円 大砲2門
小銃48挺 ラッパ2本
弾薬（小銃）3,000発
弾薬（砲）17箱 軍刀6本
胴乱2個 毛布330枚
外套226着 衣袴288枚
被服若干 糧食1,000包
鞍馬一匹

その他 兵士10余名
軍吏補

これらの戦いの官軍の戦死者は曾於市岩川の「官軍墓地」に葬られています。



○県立鹿屋農学校の全景
1917（大正6）年
1908（明治41）年
までは大隅半島唯一の
中等学校でした。



寺子屋は江戸時代に なかった？

「日本教育資料集」によると、鹿児島では私塾1校、寺子屋19校で、掲載されている県では下から2番目でした。地域も限定的で薩摩半島や奄美、徳之島などにありました。鹿児島には郷中教育がありましたが、これは基本的に武士の子ども達を対象にしている寺子屋の場合もそうでした。鹿屋では庶民のための寺子屋というのはほとんど記録に残っていません。

現在の鹿屋市では、鹿屋寺子屋事業として市内31か所の公民館や学校を活用して学習活動の支援や地域の方々との交流活動を行っています。対象は小学生です。これらの活動を通して、子ども同士の学び合いや郷土愛を育むことを目的としています。そうした意味では鹿児島の伝統的な郷中教育とつながっているともいえるのではないのでしょうか。

048

幕末からの教育のあらまし

明治になり、生活様式や風俗にも変化が見られ、また新政府によって、さまざまな改革が行われました。この改革のうち教育面では1872（明治5）年学制が定められ、全国の市町村に必ず小学校を設け、義務教育を徹底させようとなりました。しかし学校といっても、掘っ立て小屋に茅葺きの、名ばかりの校舎で、年額6円の授業料の負担は父母にとってはひどく重いものでありました。当時の1円は約2万円。このころ、鹿屋地域でも郷校が設置されましたが、これが鹿屋地域の学校の始まりです。鹿児島県の場合、寺子屋などの庶民教育施設が少なく、学制に定めた小学校を開設することができませんでした。そこで、変則ではあるものの、各地に増設されつつあった郷校を小学校としました。

1871（明治4）年の廃藩置県により大隅地方の大部分が都城県に編入され、鹿屋では都城県第〇〇郷校という名称で設立されていきました。1872（明治5）年の都城県第三六郷校が鹿屋小学校です。その他、高隈、大始良、南、花岡、笠野原などの郷校が設立されました。

大正時代になると、12年に鹿屋中学校、14年に鹿屋女学校など上級の学校も設置されるようになりました。

現代の寺子屋：放課後、地域住民によって運営されています。



りりし田崎塾



高須浜っ子塾



寺子屋しんかわ塾

○学校の創立から太平洋戦争へ

第一次世界大戦によって日本は繁栄しましたが、その後は一転して不況のどん底に落ち込むことになりました。

この不況から抜け出す手段として日本は戦争への道を歩むことになり、学校もその影響を強く受けることになります。1941（昭和16）年3月、「国民学校令」が公布され、これまでの小学校の名称が廃止され、国民学校に切り換えられました。

太平洋戦争が始まり、学校などでも竹やり訓練が行われるようになり、国内は総力戦の様相が一段と強まってきました。中学校では運動会が中止になったり鹿屋高等女学校では外国語の学習が廃止になったり教育が限定されるようになりました。

野里小学校や笠野原小学校は特攻隊の兵舎として、祓川小学校は戦車隊の兵舎として使用されたため、授業は中止されたり分散授業となったりしていきました。

総力戦の名の下、小学生であっても、出征家族の援護のための田植えや草取りなどの農作業奉仕がありました。

戦災を免れたのは鹿屋・大始良・南・西俣・古江・鶴羽の各小学校のみでした。このように、戦争は物質的にも精神的にも大きな打撃を与え、8月の終戦となりました。

江戸時代の学問所（串良）

江戸時代の串良の教育は、鶴亀城の西端の射場屋敷という台地に二才集会場を設け、そこを学問所としました。

薩摩藩には、郷中教育とよばれる独特の教育システムがあり、その特徴は同じ地域に住む異年齢集団の自主的な相互教育になります。串良ではその学問所を鶴亀城にあやかって鶴亀学舎とよんだそうです。鶴亀学舎は現在の串良小学校にあたります。

郷中教育は青少年を稚児「ちご」と二才「にせ」に分けて、勉強・武芸・山坂達者（今でいう体育・スポーツ）などを通じて先輩が後輩を指導することによって強い武士をつくろうとする組織でした。

現在の鶴亀城跡を見学するなら鹿屋市串良町岡崎を訪ねると、本丸の城郭を確認できます。



※鶴亀城
本丸跡



進駐軍上陸地の碑

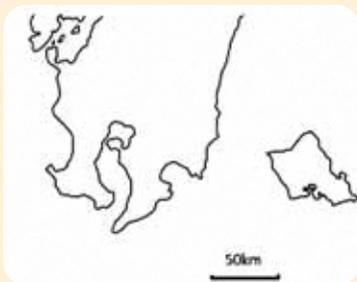


戦没者慰霊塔（小塚公園）

真珠湾攻撃の訓練

1941（昭和16）年、鹿屋基地の淵田美津雄中佐は、鹿児島湾で浅海面雷撃の訓練を実施しました。鹿児島市の上空40メートルという超低空の危険な飛行や、海面すれすれに雷撃機が何機も飛び出し、次々に雷撃を繰り返すといった危険な飛行訓練に、市民たちはとても驚いたといえます。

鹿屋での周到な計画と準備によって、真珠湾攻撃は太平洋戦争における日本が成功した作戦のひとつとして語り継がれるものになったといえるでしょう。



鹿児島県とオアフ島を同縮尺で比較

049

太平洋戦争に関する歴史

満州事変、盧溝橋事件を発端とする日中戦争の行き詰まりから日本は真珠湾を攻撃し、5年間にわたる太平洋戦争が始まりました。日本軍はマレー半島及び真珠湾の先制攻撃を成功させましたが、1941（昭和16）年6月のミッドウェー海戦を契機に受け身の戦いを強いられ、全国各地が空襲の被害を受けるようになりました。1945（昭和20）年4月にはアメリカ軍が沖縄に上陸、8月には広島・長崎に原爆が投下されるなど日本軍に勝算はなく、8月15日にポツダム宣言を受諾、太平洋戦争は終結しました。

鹿屋では終戦後の混乱の中、1945（昭和20）年9月4日に、高須の金浜海岸に進駐軍アメリカ海兵隊約2,500人が上陸しました。当時、鹿屋の多くの人々が進駐軍を恐れ山間部等に逃げたといわれています。

○戦没者慰霊祭(小塚公園)

小塚公園慰霊塔は、1958（昭和33）年3月20日に建立されました。尊い生命を祖国のために捧げた若者たちの御霊が祀られています。高さ11mの慰霊塔の頂上には平和の象徴である鳩の像が設置され、塔内には908名の戦没特攻隊員の発進日・所属



桜花の碑



野里国民学校跡の国旗掲揚台

隊名・階級・氏名を書いた過去帳が納められ、^{こんりゅう}建立の日を命日として、毎年戦没者慰霊祭が行われています。慰霊祭には全国各地から遺族が訪れ、海上自衛隊鹿屋航空隊員や市民と共に祈りを捧げます。

○^{おうか}桜花の碑

先ほどの慰霊塔に近い野里町に元特攻隊員らによって建てられた記念碑（桜花の碑）があります。この場所は「神雷特別攻撃隊」（桜花専用の特攻部隊）の宿舎として使われていた旧野里国民学校跡地の一角です。この碑に書かれた文字は神雷部隊と海軍報道班員として生活を共にした作家・山岡荘八氏が書いています。

桜花とは、人間爆弾と呼ばれた特攻専用の飛行機で、1,200kgの徹甲爆弾^{てつこう}が組込まれ航続距離が37kmしかないため、母機に搭載され敵の近くで切り離され敵に体当たりをします。この桜花の碑の辺りは、宿舎から滑走路に向かう位置にあり、出撃する特攻隊員が最後の別れの盃を交わした場所といわれています。

今は車道が横切っていますが、当時は、その道路向かいに、旧野里国民学校がありました。今でも国旗掲揚台が当時のそのままの場所に残されています。

平和記念公園

平和記念公園には、旧海軍航空隊串良基地から飛び立ち戦死した特別攻撃隊員・一般攻撃隊員を祀る慰霊塔が建立されています。滑走路跡の2本の直線道路は桜の名所としても知られ、ドラマ「永遠の0」のロケ地にもなりました。



慰霊塔



滑走路跡



鹿屋基地1ビル



金浜海岸に上陸するブルドーザー



会談が行われた部屋（現在は解体）



上陸した米軍と挨拶を交わす陸海軍代表

鹿屋平和学習ガイド について

鹿屋市内には戦時中3つの（鹿屋、串良、笠野原）海軍基地があり、日本で最も多くの特攻隊員が出撃したまちとして知られています。

「鹿屋平和学習ガイド」は、平成27年度に鹿屋市が正式に認定したガイドで、旅行ツアーや修学旅行などにおいて市内に残る戦争遺跡や歴史についてわかりやすくご案内します。

【対象人数や料金】

個人や団体で料金が異なりますので、下記までお問い合わせください。

【連絡先】

〒893-0064
鹿屋市西原3丁目11-1
鹿屋市観光協会
TEL0994-41-7010
FAX0994-41-6000
(関連サイト)



050

戦争の秘話「太平洋戦争は、 鹿屋から始まった」

鹿屋には海上自衛隊鹿屋航空基地があり、前身は^{ぜんしん}1936（昭和11）年設置の海軍佐世保鎮守府所属^{させぼちんじゅふ}鹿屋航空隊です。日中戦争以降、中国大陸や南方へ向かう軍事拠点として重要な役割を果たしてきました。そしてこの地は、太平洋戦争が始まるきっかけとなりました。「鹿屋会談」が行われた場所でもあります。「鹿屋会談」とは、1941（昭和16）年^{おおにしたき}連合艦隊司令長官山本五十六の命を受けた、大西瀧^{おにしだき}治郎参謀長と源田實^{げんだみのる}参謀によって、「鹿屋基地1ビル」（写真左上・左下）でハワイ真珠湾への奇襲作戦が練られました。その密談が「鹿屋会談」と呼ばれています。それが「鹿屋から始まった」と言われている理由です。

1945（昭和20）年8月15日の日本の敗戦後、9月4日東京湾に次いで2番目に、進駐軍（アメリカ海兵隊）が日本本土に上陸した地（写真右上・右下）が鹿屋市高須町の金浜海岸です。その後、GHQによる日本の占領政策が始まっていきました。

鹿屋市の戦跡地図



○市内の戦跡

日本でも最も多くの特攻隊員が飛び立った「鹿屋」

- 川東掩体壕
- 敵機の空襲等から飛行機を守るために作られた格納庫
- 桜花の碑・野里国民学校跡
- 人間爆弾桜花の神雷部隊が宿舎としていた場所
- 小塚公園
- 特攻隊908名の御霊をまつる慰霊塔がある公園

特攻隊の足跡が残る串良エリア

- 串良基地跡の地下壕第一電信室
- 特攻隊が突撃前に送る電信を受信していた地下壕
- 平和公園（串良航空隊の航空基地跡）
- 滑走路跡の2本の直線道路は桜の名所

戦後が始まった地 高須エリア

- 金浜海岸（進駐軍上陸地の碑）
- 1945（昭和20）年9月4日、日本本土で2番目に進駐軍アメリカ海兵隊2,500人が上陸
- 1945（昭和20）年9月2日、ミズーリ号調印式の前に、東京湾に日本本土初上陸している。
- 高須トーチカ
- 米軍の本土上陸に備えて海岸部に作られたトーチカ（陣地）

弾薬集積所の大爆発

鹿屋市郷之原町にあり、敷地約800㎡に、日本軍の250キロ爆弾315個や10キロロケット弾など78個など総重量226.7tの爆発物が集められていました。1945（昭和20）年11月8日午前11時ごろ、爆発事故が発生。近くの2集落69戸が焼け、344人が家を失いました。

2020（令和2）年、鹿屋市は米国立公文書館に保管されていた米軍の事故報告書を発見しました。報告書によると、日本人作業員が小型照明弾を誤作動させて大型照明弾に引火したのが事故原因とのことでした。



米国立公文書館に残る爆発前の弾薬集積所の写真



鎌田堀の深井戸で、生活用水を汲み上げている様子
(1927(昭和2)年頃)



つちもっほい

土持堀の深井戸県指定文化財

鹿屋市串良町細山田5323番地1

天保(1818年から1843年の間)に掘削された
直径約90cm、深さが約64mもある井戸

昭和産業の進出 (かねがらち鐘淵紡績)

昭和産業とは、鐘淵紡績(現クラシエ)が全額出資した会社です。1929(昭和4)年に設立されました。目的は、養蚕(蚕を育てて生糸をつくること)でした。鹿屋に大隅支店が置かれ、笠野原を中心に、13km²(東京ドーム270個分以上)の土地を昭和産業が買い上げて桑畑をつくり、大規模な養蚕を開始しました。鹿屋だけでなく、志布志や宮崎県でも大規模に養蚕を行うようになりました。

しかし、会社創立の年に世界恐慌という世界的な大不況が発生したことで生産が縮小され、鹿屋では1934(昭和9)年に製造を中止してしまいました。また、日中戦争や太平洋戦争が始まったことにより、戦争に関する産業が優先されるようになっていき、製糸業は優先されなくなっていきました。

化学繊維がつくられるようになった1952(昭和27)年に、昭和産業は解散しました。

051

シラス台地とのたたかい

シラスとは、約2万6000年前の始良カルデラの噴火の時に出了た火砕流や、空中に舞いあがった軽石や火山灰などからできた土で、鹿児島県の約6割はこのシラスに覆われています。シラス台地とはその土が積もってできた少し標高が高い土地のことです。

シラス台地は水が得にくく、さらにシラス自体が栄養分に乏しい上に、水を保ちにくくて雨が降ってもすぐに水が地下に吸い込まれてしまうため、農耕がしづらく、「不毛の地」と呼ばれていました。

そのため人々は陸稻、アワ・ヒエ・麦類・大豆・菜種などを細々と作って暮らしてきました。江戸時代中期に琉球(今の沖縄県や奄美群島)から伝わったさつまいもは水が乏しくあまり土地に栄養がなくても育つ作物だったため、飢えをしのぐために当時の薩摩藩で急速に広まっていきました。

また、シラスの土地ではがけ崩れや土石流などの災害が起きやすく、シラスとのたたかいは災害とのたたかいでもあります。土砂崩れの被害を防ぐための砂防ダムを作ったり、道路をがけの側から離したりする対策が行われています。



笠野原台地を開発するトラクター（1931（昭和6）年頃）

○笠野原台地は6,000ha

笠野原台地は、東側は串良川、西側および南側は肝属川に囲まれた南北16km東西12kmほどの三角形に近い形の台地で、シラスと水の不足で生活がしづらいところでした。

「いやじゃ いやじゃよ 笠ん原はいやじゃ55尋の綱を引く」という民謡が残っています。55尋とは約100mの長さです。笠野原では水を得るために川に水を汲みに行くか、深いところで80mを超す井戸から綱で引っ張って水を得なければなりません。水汲みの仕事が嫌で、笠野原に嫁ぐことを女性が嫌がったことを歌われるほどたいへんだったのです。

笠野原台地では養蚕やさつまいもの栽培などを行っていましたが、大正時代に笠野原耕地整理組合が結成されました。そこで、農業の増産の前に飲料水の確保が先ということが決まり、1925（大正14）年から1927（昭和2）年かけて、組合員からお金を集め、ほぼ人力で水道をひきました。また、農地を区画整理して直線にしたので農作業が格段にしやすくなり、笠野原台地の農業発展の基礎となりました。

鹿屋初トラクター

笠野原はもともと松や茅という植物が生い茂り、耕地にするためには開墾する必要があります。人力や馬を使って木の根を抜いて開墾が進められました。荷馬車を使って道具を運搬したことで開墾は進んでいきました。

さらに、開墾への補助金を農林省（当時の国の役所）に申請して補助金を得ることに成功しました。

1931（昭和6）年頃にはトラクターが導入され、開墾がさらに進んでいきました。このトラクターが鹿屋で初めて使われたトラクターのようです。「昭産」という文字が見えます。昭和産業が養蚕のために開墾を進めた際の写真だと考えられます。トラクターの側に立つ人はどこか誇らしげです。不毛の地を緑の地にするのだという気持ちだったのかもしれませんが。この開墾地には桑や、現在も栽培が盛んな茶などが植え付けられました。

この後も農業用の水は不足し、人々の暮らしは決して楽ではありませんでした。



笠野原台地開発史
～水を求めて苦難の歴史～より転載



完成した高隈ダム

水が貴重だった逸話 「タタキ水」

1916（大正5）年頃、細山田地域に県の役人が視察に来て、ある有力者の家に泊まった時の話です。

歓迎の宴で、役人が有力者の娘に水が欲しいと頼みました。

役人が娘の行動を見ていると、娘は水瓶をカーンと叩いては水を汲み、カーンと叩いては水を汲んでいました。役人は飲料水が大切なので水神様へのお礼の意味で鐘をたたいて水を汲むのだと、その娘の水への感謝の気持ちや素直さにとても感心したそうです。

翌朝、そのことを家の主に伝えると、「それは、カンとたたいてボーフラを沈めてから水を汲んでいるんだ。」と言われました。

役人は気分が悪くなり、お酒を飲みなおしたそうです。

052

高隈ダムの完成

『いやじゃいやじゃよ 笠野原（かさんばい）は
いやじゃ 馬の背中で水を飲む』

この台地に住んだ人々の、水に苦しんだ悲痛な心情が歌われた民謡です。

江戸時代から移住が始まった笠野原台地は火山噴出物が積み重なってできたシラス台地が広がり、農業だけでなく生活用水の確保にも人々は苦労を重ねていました。降った雨を桶おけにためて掃除に使ったり、一度沸わかした風呂さはんじを3日水を替えずに入ったりすることは日常茶飯事でした。

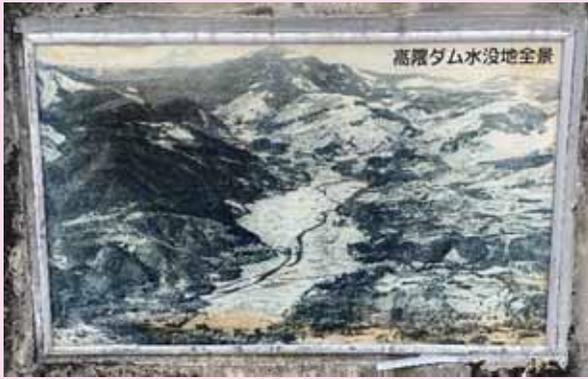
1925（大正14）年、県議会議員であった中原菊次郎らが中心となり、まずは飲料水の確保に動きました。1926（昭和2）年、初めて上水道が引かれたとき、台地には人口約5,000人、1,000戸の農家が生活をしていました。その後耕地開発が進められ、戦後になると食糧不足の解決のため、笠野原畑地かんがい事業の構想が持ち上がり、1953（昭和28）年高隈ダムの建設が計画されました。

総事業費26億円

高隈貯水池：上古園・下古園・井手の3集落

高隈ダム：柏木地区204戸 耕地

移転家屋193戸（学校・公民館）



水没した柏木地区



寺園勝志県知事像

ダムの建設をめぐるのは、反対運動が巻き起こりました。寺園勝志鹿児島県知事の懇親会の際は、200名の反対総決起集会が開かれました。デモは繰り返され、地区内を二分するほどでした。畑かん推進派は粘り強く説得に当たりました。県庁前で約1,200人がデモを行なうほどの反対運動でしたが、除々に収束し、水没財産保障交渉の調印が行われました。

1967（昭和42）年、ダムから水が送られ、スプリンクラーで水が散布されたときは歓声が上がりました。スプリンクラーが設置されたことで、東原地区の茶園は霜の害から免れ、全国品評会でも上位入賞するほどの銘茶となっています。

1980（昭和55）年、全ての工事が完成しました。甘藷^{かんしょ}や菜種しかとれなかったような荒地であった笠野原台地は、高隈ダムで貯水した水が配水されて生まれ変わりました。

現在は、稲^{いね}・露地野菜^{ろじ}・施設野菜^{かき}・花卉^{かき}・たばこ・飼料作物^{そば}・麦^{そば}・蕎麦^{くわ}・茶^{ちや}・桑^{くわ}・果樹^{くわ}・芝^{しば}などが収穫できるようになっています。

沈んだ集落

高隈ダムの建設にあたり柏木地区（上高隈町下古園・上古園・井手の3集落）が水没することになりました。1959（昭和34）年にダム建設が正式に決定すると水没地区の住民による高隈ダム対策委員会が設置され、1962（昭和37）年8月にその補償について決着し、1963（昭和38）年2月に着工し、1967（昭和42）年3月にダムは完成しました。

実際にはダム建設に関わる論争は15年に渡って行われており、笠野原開発の礎^{いしづえ}となり離村などされた方々のことは、忘れてはならない歴史です。

〔水没した主な財産〕

- ・完全水没…152戸
- ・水没線上…44戸
- ・非移転…8戸
- ・水田…57町9反
- ・畑…5町1反
- ・山林…17町6反
- ・宅地…3万408坪

〔移転人員〕

- ・大人…638人
- ・子ども…284人



正面からの輝北ダム

重力式コンクリートダムの堂々とした姿を見ることができます。

守られた神社の宝物



12個の仮面

ダムに沈む家々の民俗は、その戸数は少なく、地域は狭いものの有形無形の文化の伝承は豊かでした。輝北歴史民俗資料館には水没を免れた12個の仮面が展示されています。写真の鬼神面は利神社の神舞面として使用されました。



鬼神面

053

輝北ダムの完成

鹿屋市輝北町^{ひらぼう}平房にある輝北ダムは鹿屋市・志布志市・大崎町の農業用水のダムとして建設されました。本地区は、鹿児島県の東部、大隅半島の中央部に位置する4,000haの畑地帯で、県内でも中核的な農業地帯であり、畜産は県内有数の生産量を誇り、いも類や茶の栽培も盛んです。

しかし、もともと保水性の乏しい火山灰に覆われ乾燥しやすく干害を受けやすいため、かんがい施設の整備が必要でした。これまでも先人の努力により、^{ひら}拓かれた広大な畑地の生産性向上と保全のために様々な整備が行われてきましたが、かんがい施設整備はその総仕上げとも位置づけられるものです。その中心が輝北ダムになります。

輝北ダムの建設工事が始まったのは1994（平成6）年で、本体工事は1999（平成11）年に着工しました。完成したのが2005（平成17）年です。この工事は、正式には曾於南部畑地かんがい事業という名称になります。この輝北ダムの規模は長さ140m、高さ41.9mの直線コンクリート堰（^{せき}長方形の大型の箱）で、総貯水量は820万³mにもなります。それぞれの畑地への支流を合わせると79.1kmになり、地域農業の発展が期待されました。



ダム周囲に咲き乱れるアジサイ（6月頃）

しかしながら建設に伴って平房川流域の水没という避けられない問題が発生し、今まであった宅地、山林、田畑、道路が湖底に沈むことになりました。先祖代々長い歴史のある郷土のもの全てが失われることに対して地元の人々の悔しさ、悲しさは大きなものでありました。当然そこに大きな反対運動も起こり、何回も話し合いが行われました。ダム建設予定地は人間の営みが縄文時代にまで遡れるほどに長い歴史を持つ地域であるといわれており、水没前に貴重な歴史的、民俗文化財について調査し、保存策についても検討する必要がありました。

具体的には、農地等約79haが水没し、民家45世帯と公民館の移転が避けられないことが明確になり一戸一戸交渉が行なわれました。その結果、曾於地域の農業の発展をはかるための畑地かんがいの必要性について住民の理解を得ることができ、輝北ダムの建設につながりました。水没地域の歴史的民俗文化財の調査については、鹿児島大学の民俗学専攻の学生らを中心とした調査団が編成され調査が行なわれました。このような経緯をへて造られた輝北ダムは、種類としては重力式コンクリートダムと呼ばれるもので、一番多く造られているダムです。水の力をダムの重さで支える構造で、横から見ると三角形になっています。重い堤体を支えられる硬い地盤に作られました。

ダム湖の活用



農業用水のダムとして建設された輝北ダムですが、ボート競技の練習場としても利用されており、2023燃ゆる感動かごしま国体ではローイング（ボート）の会場となります。輝北ダム建設に伴い、移転記念として設置されたのが輝北ダム平房公園です。きれいに整備され市民の憩いの場になっています。





1935（昭和10）年の昭和天皇行幸



平田邸に到着した昭和天皇
写真提供：平田盛家氏

平田邸

平田邸は鹿屋の麓に位置する、鹿屋でも最も古い武家集落である古前城の中心にあります。古い武家屋敷作りの建物ですが、昭和天皇が宿泊されるにあたって、和室を洋風にしつらえたそうです。

二鶴（料理屋）

現在の北田・大手町商店街に「二鶴」という料理屋がありました。お店の情報についての記録は残っていないのですが、お店の外観と、大通りに掲げられた看板の写りが残っています。

看板には、「二鶴」「電話二〇八番」「うなぎ蒲焼」「ちり鍋」「折詰」などの文字を見ることができます。

「ちり鍋」は、白身魚を野菜などと一緒に水炊きにした鍋料理で、「折詰」は、木で



できた浅い箱に料理を詰めたお弁当です。

054

昭和天皇の行幸ぎょうこう

鹿屋の地に昭和天皇が行幸されたことが、2回あります。上皇陛下（平成の天皇）は皇太子の時に行啓ぎょうけいされました。そのことについて紹介します。

○昭和天皇の1回目の行幸 1935（昭和10）年

あひらのやまのうえのみさきぎ
明治時代に正式に吾平山上陵が確定された後、1935（昭和10）年11月に昭和天皇は宮崎県と鹿児島県の陸軍の軍事演習の視察で志布志に来られた際に、初めて吾平山上陵を行幸されました。

これ以前は、1907（明治40）年に大正天皇が皇太子時代に、1920（大正9）年に昭和天皇が皇太子時代に、代理の方が御代拝ごだいはいされています。

○昭和天皇の2回目の行幸 1949（昭和24）年

戦前の日本では天皇陛下のことを神様の末裔として敬っていましたが、終戦翌年の1946（昭和21）年1月1日、昭和天皇は“天皇は神ではなく人間である”という宣言を表明されました。そして、戦後苦しい想いをしている国民をなくさめ励ますために、1946（昭和21）年2月～1954（昭和29）年8月にかけて日本各地をご巡幸じゆんこうされました。

1949（昭和24）年6月1日から4日間、鹿児島



上皇陛下の皇太子時代の行啓

写真提供：長崎まさ子氏

県を行幸される昭和天皇を一目見ようと、多くの県民が駅や沿道などに集まりました。

鹿屋には6月3日、鹿屋農業高等学校の奉迎場（特設会場のようなもの）に昭和天皇が到着すると、約3万人の鹿屋市民が旗を振り、歓声をあげて出迎えました。

その後、福岡商工局鹿屋無水酒精工場などを視察されました。

視察を終え、昭和天皇は鹿屋市古前城町の平田邸へ宿泊され、翌朝には大勢の市民の歓声の中、鹿屋駅から志布志へのご出発されました。

○上皇陛下の皇太子時代の行啓

上皇陛下（平成の天皇）は、1962（昭和37）年5月9日に、1959（昭和34）年に上皇后の美智子様とのご結婚の報告に吾平山上陵を訪れています。この時の写真は、吾平山上陵に複数枚残されています。



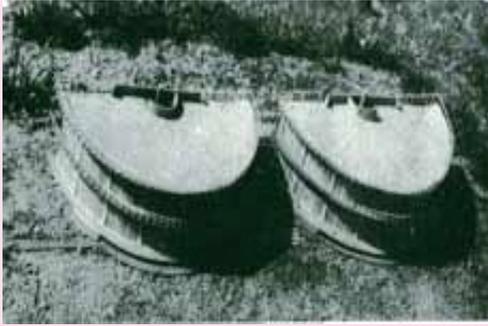
その他の皇族の吾平山上陵への参拝

吾平山上陵は、天皇家の始まりの地であるため、皇族の方（てるのみやしげこないしんのう照宮成子内親王殿下、あき三笠宮崇仁親王殿下、あき北白川房子様）が訪れています。

その中で、北白川房子様（明治天皇の7女、伊勢神宮祭主）については、その時の写真も吾平山上陵には残されています。



- ・照宮成子内親王殿下... 昭和天皇の第1皇女子（2男5女のうち第1子）
- ・三笠宮崇仁親王殿下... 大正天皇の第4皇男子（昭和天皇の弟）



鹿屋小学校の半円校舎
(昭和32～55年)



旧百引中学校
(2011(平成23)年3月閉校)

西暦・和暦	学校数合計	鹿屋市小・中学校の沿革
1864 (元治元)	小1校	百引小 (当時:和泉ヶ野「学問所」)開校
1869 (明治2)	小4校	鹿屋小(当時:第三十六郷校)開校 鶴羽小(当時:第六十五郷校)開校 高隈小(当時:素謙館)開校
1873 (明治6)	小7校	笠野原小 (当時:第七十五郷校)開校 大始良小 (当時:第五十五郷校)開校 串良小(当時:第七郷校)開校
1874 (明治7)	小9校	吾平小 (当時:下第六十一郷校)開校 南小(当時:第五十六郷校)開校
1876 (明治9)	小12校	市成小 (当時:市成尋常小学校)開校 細山田小 (当時:細山田尋常小学校)開校 上小原小(当時:上小原小学)開校
1877 (明治10)	小13校	高尾小(当時:柏木の馬庭源四郎宅 借用寺小屋式見習い)開校
1878 (明治11)	小14校	田崎小(当時:永吉小学校)開校
1878 (明治11)	小15校	高須小(当時:北高須の上原の家屋 を教場として)開校
1878 (明治11)	小17校	被川小(当時:上名小学)開校 大黒小開校
1879 (明治12)	小20校	野里小開校 平南小 (当時:平房簡易科小学校)開校 鶴峰小(当時:上名小)開校
1892 (明治25)	小21校	菅原小学校 (当時:白水尋常小学校)開校
1899 (明治32)	小22校	下名小 (当時:下名尋常小学校)開校
1909 (明治42)	小24校	西原小 (当時:西原尋常小学校)開校 浜田小(当時:大始良尋常小学校分 教場)開校
1918 (大正7)	小25校	神野小(当時:鶴峰高等尋常小学校 裏岳分教場)開校
1923 (大正12)	小26校	西俣小 (当時:西俣尋常小学校)開校
1924 (大正13)	小27校	古江小(当時:鶴羽尋常高等小学校 分教場)開校
1936 (昭和11)	小29校	柏木小 (当時:柏木金太郎宅を借用)開校 高牧小(当時:西原尋常高等小学校 高牧分教場)開校
1941 (昭和16)	小30校	桜町小(当時:新城小学校校野分教 場)開校
1943 (昭和18)	小31校	鹿屋小(当時:鹿屋国民学校)が分 離し、寿小(当時:第二鹿屋国民学 校)開校

055

学校の変遷

1872(明治5)年の「学制」発布により、本市(合併前の鹿屋市・輝北町・串良町・吾平町)にも小学校が増加し、1945(昭和20)年代前半までの間に30校以上整備されました。また、1947(昭和22)年には、現在の6・3・3制が導入されたことにより、14校の中学校が誕生しました。

また、1970(昭和50)年代になると、市街地の学校が大規模化し、新たに3校(2小学校・1中学校)が開校することになりました。

一方、本市全体の児童生徒数は年々減少するなかで、学校規模の二極化が進み、地域によっては小規模、過小規模の学校が増加してきました。特に、平成20年代に、統廃合が行われ、2021(令和3)年には、小学校23校、中学校12校となっています。





吾平中学校
(1955(昭和30)年)



串良中学校
(1954(昭和29)年)

今後本市では、学校規模の適正化や学校施設の長寿命化を図りながら、子供たちの学びの環境を整えてまいります。

○鹿屋市立鹿屋女子高等学校の沿革

鹿屋女子高等学校の歴史は、1958(昭和33)年4月1日から始まります。当時の定員は300人で、全日制家庭科の高等学校として授業を開始しました。1962(昭和37)年の創立5周年式典では県立図書館長の久保田彦穂(椋鳩十)氏作詞の校歌が発表されました。その後、定時制畜産科(高隈校舎)が併設され、1973(昭和48)年に鹿屋女子高等学校併設高隈高等学校と改称しました。(昭和63年閉校)平成26年に現在の普通科、情報ビジネス科、生活科学科に再編され、2020(令和2)年の3月には現在の新校舎が完成しました。

○鹿屋市立鹿屋看護専門学校の沿革

鹿屋市立鹿屋看護専門学校は、豊かな人間性を培い看護師として必要な知識・技術・態度を修得させ、地域社会に貢献できる有能な人材育成を目的に、1978(昭和53)年に看護婦養成所として開校しました。1994(平成6)年には鹿屋市立鹿屋看護高等専修学校と統合され、高等課程准看護学科・専門課程看護学科の2学科を有する学校となりました。2008(平成20)年4月、3年課程の看護師養成所へ課程変更し、現在に至るまで、多くの卒業生が保健・医療・福祉施設等で地域に貢献する看護職として活躍しています。

西暦・和暦	学校数合計	鹿屋市小・中学校の沿革
1947 (昭和22)	小31校 中14校	鹿屋中(当時:被川中)・第一鹿屋中(当時:西原中)・田崎中・大始良中・花岡中・高須中・高隈中・市成中・百引中・串良中(当時:串良第一中第三教場)・吾平中・神野中(当時:吾平中神野分校)
1948 (昭和23)	小32校 中14校	東原小(当時:被川小学校東原分校)開校
1950 (昭和25)	小33校 中14校	西俣小星塚分校が開校
1958 (昭和33)	小34校 中14校	岳野小(当時:二川尋常小学校岳野分教場)開校
1966 (昭和41)	小33校 中14校	西俣小星塚分校が開校
1971 (昭和46)	小31校 中14校	高牧小・桜町小が開校となり、鶴羽小学校に統合
1979 (昭和54)	小32校 中14校	西原小が分離し、西原台小開校
1983 (昭和58)	小33校 中14校	寿小が分離し、寿北小開校
1987 (昭和62)	小33校 中15校	鹿屋中・田崎中が分離し、鹿屋東中開校
1988 (昭和63)	小33校 中15校	柏木小が開校し、高隈小に統合
1990 (平成2)		岳野小が休校(2011に閉校)
1991 (平成3)	小32校 中14校	神野中が開校し、吾平中に統合
2006(平成18)		鹿屋市・輝北町・串良町・吾平町の合併
2011 (平成23)	小28校 中13校	百引小・平南小・市成小・高尾小・岳野小(休校中)が開校し、輝北小開校 市成中・百引中が開校し、輝北中開校
2013 (平成25)	小25校 中13校	鶴羽小・古江小・菅原小が開校し、花岡小開校 施設一体型小中一貫校(花岡小・花岡中)開校 神野小が開校し、吾平小学校に統合
2015 (平成27)	小24校 中13校	浜田小が開校し、大始良小に統合 高須中が開校し、第一鹿屋中・大始良中にそれぞれ統合
2020 (令和2)	小23校 中12校	高須小が開校し、野里小に統合